ぶどうの木

第 12 号

目　次

巻頭言 …… 榎本利三郎 …… 1
牧師館訪問記(2) …… 取材班 …… 2
銀婚の年 …… 広田寿 …… 19
主に寄り頼む人は幸いである（西原フクヨ姉の思い出） …… 22
福音 …… 太田邦子 …… 25
救いは神にあり …… 岩隈多賀子 …… 32
夫の昇天 …… 小田ミドリ …… 34
俳句「妻との12か月」 …… 正野義雄 …… 36
木曜会に導かれて …… 貞サユリ …… 37
昨今思うこと …… 貞サユリ …… 39
幼稚園での思い出 …… 貞サユリ …… 40
主に感謝せよ …… 岡嶋ミヨ子 …… 42
わたしは呼び戻された …… 首藤正 …… 48
わたしに従ってきなさい …… カナンの女 …… 55
わたしは救われた …… 綾部時男 …… 63
神の国と神の義を求めて(2) …… 上島南明 …… 69

八幡前田教会
大濠公園教会

巻頭言

榎本利三郎

「おおよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。彼は水のほとりに植えた木のようで、その根を川にのばし、暑さにあつても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ。」

（エレミヤ17・7－8）

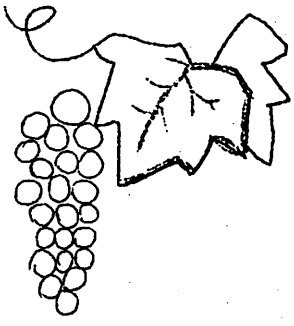
春は暖かく、夏は暑い、秋は涼しく、冬は寒い。これは日本の四季です。夏、暑い陽がカンカン照りつけると、北海道の様に涼しく夏を過すことができたらと思い、冬、寒風肌を刺す様な冷たい日が続くとハワイの様な常夏の国だったらさぞ楽しかろう。その上冷房費も暖房費もいらないと誰もが思います。

然し今年の夏は異常な冷夏でした。かねての夢が叶えられたと思いましたが、肉の慾は限りないものですね。涼しくて海水浴もできない。冷たい飲物も飲めない。西瓜も美味しくない……と、イスラエルの民の様に心の何処かでぶつぶつぶやいて居るのではないでしょうか？　やはり夏は暑く、冬は寒いのがいゝですね。

涼しい夏のため東北・北海道地方では冷害がひどく、九州でも野菜の記録的な値上りとなりました。此の秋になって果物の収穫量も少く、その味も落ちて農家も困っております。

ところが、主のめぐみにより、教会の「ぶどうの木」はこの異常な冷夏にあつても、暑さにあつても、恐れることなく豊富に結実し、感謝・讃美・歓喜の素晴らしい味と香りをもつて居りますことを主に感謝致します。早く皆様に此の豊かな実をお届けし度く願いながら、収穫が大変遅れて申し訳ありません。どうぞ祈りのうちに一つ一つの実を味わつて、主にたより、主を頼みとして更に信仰の歩みをつゞけて、多くの主に喜ばれる実を結ばせて頂き度く願っております。

一九八〇年一一月



牧師館訪問記（二）

―「ぶどうの木」取材シリーズ―

一、はじめに

そもそも「ぶどうの木取材班」が誕生したのは、昭和四十七年でした。

それは、すばらしいお証しを持っておりながらペンを取るのが苦手な方、暇のない方などを訪問し、一人でも多くの方に「ぶどうの木」に参加していたゞくと共に、交わりを深めたいという願いから発足したのでありました。そして最初に企画されたのが「牧師館訪問記」であったのです。

第一回は「ぶどうの木第八号」（昭和四十八年四月発刊）に、先生の学生時代から献身に至るまでが掲載されました。それから続篇を早くと願いつゝも、七年がまたゝく間に経ってしまいました。

このたび教会創立四十周年を迎えたこの機会に、ぜひ共続篇を載せようということになって、当時とはすっかりメンバーも変った新しい取材班が、二月のある日、再び牧師館を訪れたのでした。

取材班といっても、青年会のほとんど全員が参加しましたので、それはそれはにぎやかしくも楽しい取材でありました。

先輩取材班と同様、夕食を共にした後、先生は修養生時代のことを思い出しながら、静かにたんたんと語られました。私達はそこに、どんな時にもただ一筋に主に従って来られた先生の姿、信仰の歩みを見、大いに教えられ恵まれたのであります。

以下、先生のお話しを取材班でまとめました。できるだけ「ぶどうの木第八号」牧師館訪問記（一）をもう一度読まれてからお読みになるようお奨めします。

二、献身の時

私が、昭和七年に、（この前お話した所とちよっとダブルけれども）新年聖会に出て、恵まれて、イエス様が私のために十字架の上であのむごたらしい死に方をして下さった。他の人じゃない、私のためだったということを知ってですね。それまで十字架というのは、何かいまわしい、血生臭いものだと思って避けるような気持ちだったですけど、その時話を聞いている間、目の前に十字架がギラギラ光る太陽のような、輝く十字架が立っているような感じがし、その十字架が、だんだんだん迫って来るような感じがしました。

その時、思わず知らず、こんなに私を愛して下さる方があるなら、私は金や地位や名誉も財産も何もいらない。そんなに愛してくださる方のために、自分の命を投げ出して、この方に応えて行きたい、そういう気持ちになって、すぐその場で神様の前に、心のうちで献身をしたわけです。

実は正直に言うと、まだ献身という意味も知らなかったんです。とにかく命がけで、このお方のご愛に従って応えたい。そして、こんなに愛していてくださる方がいらつしやるのに私は長いことその方を知らないばつかりに、もう誰も私みたいな人間を顧てくださる人はない、私一人が孤独だとばかり思つて、ほんとうに何と言いますか、人生が砂漠みたいなものだと子供の頃から思つてたんです。しかし、実は、そうじやなくて、私よりも、私が気づく前に、「おぎやあ」つて生まれる前に、もう神様の方は、私を愛して、ご自分の一人子をそんな十字架にかけていとわないほどに私を愛してくださつたと知つた時、もう一人ぼつちじやないんだ。しかも人ではない、神様が私を愛して下さつた。神のひとり子であるイエス様が、私の為に命を捨てゝ下さつたから、今こうして生きていることができるんだなあつていう事がわかつて、それでもう嬉しくなつて、もう地位も名誉もいらん、このお方のそんな愛に応えたい。それだけだつたんです。

そこで具体的にどうすればよいかということで、折滝先生に「実はこういう気持ちでおります。」と言つたのですね。そうしたら「急に言われても……。まあ、考えておきましよう。」と言つて下さつたんです。

三、エリシヤの信仰

けれども、私はその時に考えたのは、旧約聖書に、エリヤとエリシヤの記事が出ていますが、エリシヤはエリヤの僕になつて仕えた。何故かというと、エリヤ先生の内には、本当に神の御霊が宿つているんだ、このお方の信仰は本当の信仰だから自分も欲しいとエリシヤ先生はエリヤ先生に付き従つて行くんです。

それは、列王紀下ですかね。お読みになるとわかりますけど、ベテルから出てヨルダンまで、どんどんエリヤ先生について行く。ところがエリヤ先生はもう年寄りでおじいさんで

した。それで、ベテルの神学校の人達が「あんた、エリヤ先生について行つたつて、先生もお年だから間もなく天国へ行つてしまうだろう。そんな所へ行くよりも、私達と共にこゝへ留まつたらどうか」つて言つたんですが、「わかつてる。けれども、あのエリヤ先生の中には生ける神が宿つてらつしやるから、私も先生について行く」つて言つて、ベテルへ留まらないで出て行きました。

そしてエリコの方へ行きます。そうしてエリシヤは、いろんな所を通つて行きましたけれども、いつでもエリヤ先生の中にある信仰をいただきたい、それだけでどこまでもついて行くんですね。そしてエリヤも「もう私も年だから、あんたここで残つて居なさい。」と言うんですが、「はい、先生、それはよくわかります。けれども、私はやつぱり先生の中にある信仰をいただきたい。」そう言つてついて行きます。とうとうヨルダン川まで来た時に、「もう、あんたはここで止まりなさい。私は、これからヨルダン川を渡る。再び帰れないかも知れないから、もうこゝに残つときなさい。」と言われたのですけど、エリシヤは、「それでも、あなたのうちに主が生きてらつしやるから、私も一緒に行きます。」とついて行つたんです。

ヨルダン川へ行つてエリヤが上着を脱いで、それを巻いて水をたたいた時、水が割れて、その中を二人で通つている時、途中で火の馬と、火の車が、天から降りて来て、エリヤを巻いてしまつたんですね。エリシヤはびつくりして見上げている間に、エリヤは上に携え上げられてしまつたんです。その時、エリヤの上衣が上から落ちて来たんです。それを拾つてエリシヤは帰つて来たんですが、ヨルダン川まで来た時「エリヤの神よ、どうぞ、水を分けて下さい。」と、水をたたいたところが、水が割れたんですね。そういう記事がありますね。

私はそれを読んでたものですから、折滝先生は、確かに全能なる神様を信頼している。その神様は昔の神様じやない。あるいは聖書の中におさまつている神様でもない。今も現実に私どもが呼べば答えて下さる。ほんとうに信頼すれば現実に支えて下さる御方を信じてなさる。私にもその信仰が欲しい。他のことはどうでもいいから、聖書が今も信ずる私達に現実であると言うことを、自分自身が経験することのできるような信仰でありたい。そういう願いを持つておつた。

だから、先生は「神学校を紹介してあげよう。」と言うてくれたけれども、私は折滝先生のところに行つて、エリシヤ

がエリヤにつき従つたように、何でもいいからさしてもらつて、その中で、イエス様にどのように従うかを学びとりたい、そういう願いが、私の中にありました。

まあ、この願いが良かつたか、悪かつたか、そりやあわからないけど、神様は私のうちにそういうかわきを与えて下さつた。だから私は強引に、折滝先生の所に献身してまいりました。押しかけて行つたんです。

それでまあ、折滝先生が「そんなにしたつて、僕は、そんな器じやないから。」つて言われたんですけど、

「私は神様を信じます。神様が、そういう器として使いなさることができると信じます。」

今から考えたら、ずいぶん偉そうな事を言つたもんですけれども、そういう思い切つた信仰で折滝先生のところに献身したわけなんです。

四、献身の意味

まあ、献身ということを皆さんはどのように考えていますか。

ロマ書の十二章には、「あなたがたの体を、神のみこころにかなう聖き生ける供え物としてささげなさい。」とありまし。これがなすべきの祭である。信者である私達は、献身するのが当たり前である、と書いてありますね。

ところが、ある先輩の方が私に言われたんですね。（献身してからですが。）

「榎本さん、惜しいねえ、もう少し社会に出て、働いてからでも良かつたんじやないかね。」その時私はその先輩の顔をこうやつて、もう一ぺん見直したんですがね。この方は、一体何を考えていなさるのだろうか。聖書の中に、信者である私達は、皆献身することがなすべきの祭、これをしなければならないんだ、と書いてありますね。それなのに惜しいとは何事だろうかつて思つたんですね。

後から考えてみれば、たいてい牧師さんになるのは、この世の中で生活に行きづまつたとか、人生に行きづまつて、自殺しそうになつたところを救われたから、献身して牧師さんになつた人が多いもんだからですね。まだ、そんなに行きづまらないうちに献身するのはもつたいないじやないかという意味だつたと思うんです。

私、考えますのに、神様の正しい裁きの前に立たされたらどうせんでも滅びてしまうべきはずの私が、今こうしておらしていただいている蔭には、イエス様が私に代つて十字架に

死んで下さつたんだから、今、私が生きてるんじやなくて、イエス様が死んで下さつたので生かされてるんだから、私は自分のために生きるのじやなくて、私のかわりに死んで、よみがえつて下さつた方のために生きるのは、当り前だと思つたんですね。

だから献身というと、何か特別なことを神様にするようだけど、そうじやなくて、イエス様を信じた私共は、自分の計画、自分の願いを神様に押しつけるのじやなくて、神様の御心に従つて生きていくのが当たり前だと思うんです。これが献身ということなんですね。だから、神学校に行つて牧師になる事ばかりが献身じやない。信者は皆献身すべきなんですね。神様に身をゆだねて、神様のみこころに従つて行く。これが献身の生涯ですね。

私が具体的に献身したのは、牧師さんになろうとか、伝道者になろうつていうんじやなくて、とにかく、何でもいいから、神様のみこころにかなう御用だつたら、何でもさせていただこうという気持でした。

五、修養生の生活

その頃の私は口べたですし、人に会うのが嫌いな時でしたから、献身しても、仕事といつても特別なことは何もないんです。会堂や広い教会の庭の掃除やら、まあ、そんな事ぐらいですね。それを朝から一生懸命でバタバタバタバタ掃除したんですね。

今みたいに集塵機とか掃除機とかないですから、バタバタバタバタはたいてパツパツと掃きだしてですね。そして、ぞうきんがけしたり、庭の草とりをしたり、そういう事をしたわけですね。そしてまた牧師さんとこに子供さんが、あの当時男の子が二人おつて、その子供さんの守をしたりするわけなんですね。まあ、そういう事をしながら、生活させてもらつたわけなんです。

その当時は随分、集会の多い時代でしてね、火曜日から土曜日まで毎朝五時半から早天祈祷会がある。そして水曜日が祈祷会、金曜日がたぶん路傍伝道をやつたんですね。月曜日が、リバイバル祈祷会。そして日曜日が、八時半から日曜学校、十時から礼拝、午後二時からリバイバル祈祷会、これは二時から四時ごろまで、座つたままで、みんなで大きな声で一生懸命で、一人一人の名をあげてお祈りしたんですね。そうして、それが済んだら夜七時半から、今度は伝道集会。そういう集会がありました。

勿論各集会に出してもらえるわけですね。それとそういう集会の準備ですね。冬は暖房を用意するわけなんです。冬の暖房っていうのは、まあ、初めの頃は平家でしたから、大きな火鉢に、七輪で木炭をおこしてですね。やかんを置いて、シューシュー湯気を出して、皆さんがはいって来たら、「ああ、ぬくいなあ。」って言うようにしておかにやあならんのです。

それから、今度、新らしい教会にかわったら、二階なんですね。二階の広い所なんです。そこで暖房は何だったんですかね。こんな大きな練炭ストーブ。練炭を入れたストーブが二つあったと思うんです。それをおこして持って行くのが集会の準備なんです。集会が済んだら、それをまた持って降りて、ちゃんと火を消して始末する。まあ、そういう時代でしたね。そういう事で集会の準備をして、今みたいにベンチがなくて、畳敷きなんですね。だから、座布団をこうきちんときれいに揃えて並べて、そういう仕事をしたりしたわけなんですね。

それですから、私は献身したからと言って、しやべるわけでもないし、何をするわけではないし、教会の掃除だから、人ともの言わんでもすむから、ああ良かったなあと思ってですね。一生懸命喜んで掃除をしとったんです。

まあ、そういう生活を約八年ですかね。

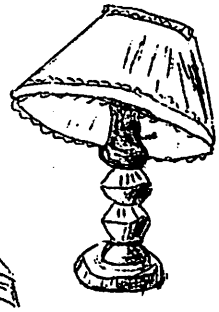
勿論掃除がすんでしまえば自分で聖書を読む、お祈りするという時間がある。聖書を自分で読んで、自分でお祈りしないことには、何も教えてもらうという事はないんです。自分自身が直接神様にぶつつかつて、神様から教えていただくというような生活だつたんです。

何か必要があつて、先生これが欲しいんですがと言えば、何の事はないかもわからんけれども、それでは神様を知る機会にならないから、必要な事があつたら、一生懸命お祈りするんですね。何でも神様が与えて下さつたものでやつて行く、そういう生活をしたんですね。だから毎日毎日が、お祈りしないことには、まわつていかないわけなんです。

ある時には、一人の若い兄弟と一緒にお祈りしとつたんです。その頃、霊感賦の譜付きを持たなかつたんです。買えば安い物だつたろうと思うんです。それを買うのはたやすいけれど、お金が無かつたので神様に祈つて与えていただきたいと思つて、一生懸命お祈りしとつたんです。そしたら、その

兄弟が言うには、
「榎本さん、そんな所でお祈りしとつたつて、与えられないよ」と言うんです。
「どうしてか」と私が言つたんですね。
「それよりも、あそこの奥さんの傍でお祈りしてごらんよ。すぐ与えられるよ。」と言われたんですね。
私は腹が立つて、腹が立つてたまらんですね。「何言うか」つていうわけですね。そんなに人に聞いてもらつて、あの人が必要だそうだからつて、人の同情を求めるような、それじやあ信仰じやない。そんな事は絶対に死んでも自分はできない。そう言つて私はわざと、その兄弟とも離れた所でお祈りするようにしたんですね。そうして何でも必要なものは、神様にお祈りして、与えられただけでやつて行く。そういう生活だつたんですね。
祈つて聖書を読んで、夜遅くなる時は二時、三時になるし、朝五時半の早天祈祷会だと、五時には遅くとも玄関を開いて、ちやんとみんなが来てもいいようにしなきやあならない。だから、睡眠時間なんて、四、五時間あつたり、なかつたりですね。
まあ、そういう時代もしばらくありました。そういう中でしたけども、聖書を一生懸命読むという事、その時代読ませていたゞいた事は、本当に嬉しかつたと思うんですね。
折滝先生は柘植先生の所に一年か一年半くらいしか修養生時代がなかつた。それですぐ遣わされて、山陰の境港ていう所に行かれて伝道したんです。開拓伝道やつたんですけどひどい迫害にあつて、その中を信仰でやりぬいた人なんですね。そういう方なんですけど、
「榎本さん、あんたはいいぞ、長い修養生時代があるからいいよ。僕なんか、一年半で遣わされちやつたんだからな。」つて良く言われるんです。
ほめられたのか、俺は一年半で行つたのにお前はまだか、と言われている感じでですね。何と返事していいかわからなかつたんですけど、今になつて、本当に、よう八年間も、大きな男の人を置いとつて下さつたんだなあと思つて、今になつてしみじみと感謝するんですけどね。
そういうわけで、直接講義を聞いたという事はなかつたんです。たゞ聖書を読んで、お祈りして、神様が心を開いて下さつて、真理を悟らせて下さる以外になかつたわけです。
エツケル先生という宣教師さんがしばらく北九州に来ていた

ことがあるんですけど、その当時エッケル先生が、
「榎本さん、どういう神学校を卒業したか」
「ハイ、私は、イエス・キリストの神学校を卒業しました。」
っていうたんですね。
そうしたら目を丸くして、
「そんな神学校どこにあるか」って言うんです。
「はい（聖書を出して）この中にあります。」と言うたら
「ああそうか、それでわかった。」って、何がわかったか知らんけど、そう言っとったですけどね。
まあ、とにかく、自分自身が、聖書の御言葉に従って、それを自分が本当に経験をして、その中で教えられ、学びとったものでなかったら、ただ理論的に、どんなに知識があっても力がない。それで、折滝先生が、あのような信仰をもってぐんぐん、あの大迫害の中を信仰で乗り超えてきなさった。
その信仰を、私も与えていたゞきたいと願っていたもんですから、一生懸命お祈りしては聖書を読んでいた。折滝先生が、「よく聖書を読みなさい。祈りなさい。」と言って下さったもんだから、時間があれば座って祈り、聖書を読む。
勿論、そんな風で睡眠時間が足らないもんだから、座ってすぐ、お祈りがおいねりになる事がよくあるんですけど、又、土曜日には折滝先生と一緒に信者の皆さん一人一人の名を呼んで祷告するわけなんですね。自分が祈る時は、目を開けて一生懸命祈るけれども、折滝先生がお祈りしなさると、心を傾けて、目を開いて、心を合わせてるんですけれども、いつの間にか、やるんですね。そうすると、先生から「君のお祈りは、おいねりになっちやったぞ」というわけですね。その時は、本当にはずかしいやら、つらいやらですね。そういう気持だったですけれども。しかし、今になって振り返ってみると、そういう中で、神様は私を整えて下さったんだと思うんですね。



六、真の教育

此の間も、ある方が言うたんですけれども、柘植先生の所で修養した人っていうのは随分大変だったって言う。何故かと言うと、柘植先生の所の修養生というのは、本当に無茶苦茶だったっていうんです。

それはどういう意味かというと、とにかく何でも、身を捧げて従つたからには、神様の御心のままに一切、文字どおり身をゆだねたんだから、死ねと言えば死ねばいいんだ。そのくらいに厳しい。だから白いものを黒いと言われても「はい」と従わなければだめだ。従う点については、その位に従わなければ、本当に従つたうちにははいらん。そういう生き方は今日のように、民主主義で、そうは言うてもこうじやないかという自分の意見をはくなんてことは許されない。だから一方的に神様の前に出たような気持ちで、先輩の言葉に従わなきやならないというような時代だつたんですね。だから随分皆苦労したつていうんです。

しかし、その無茶苦茶という、人間的に無茶苦茶な中を、神様によつて通らしていたゞくということは、これは大きな恵みだと思うんですね。

というのは、イスラエルの民が、荒野を四十年の旅、これは無茶苦茶な旅路なんです。しかしその無茶苦茶な旅路の中で、神様はどういう事でも成し得る方だつていう事を、イスラエルの民は学ぶ事ができたんですね。そうしてマナをもつて養われ、うずらをもつて飽かしめられ、岩を割つて水を飲んで、神様はどういうことでもできなさる御方であることをイスラエルの民は、あの中で学ぶことができたんですね。

だから、私どもが事情が良いとこ、境遇のいいとこでなくちや信仰ができないというんだつたら、これは本物じやないんじやないかと思いますね。本当に、逆境であろうと、どんな所であろうと、良すぎても、悪すぎても、そこで主に信頼することによつて、初めて信仰というものに、命が入つてくると思うんですね。

そういう様な、無鉄砲といいますか、その方が言われたように無茶苦茶といいますか、修養生時代なんですね。そういう中で訓練された方だから、やつぱり私もそういう中で訓練されました。しかし、それが今考えてみると、本当に最高な教育だと思うんですね。

今日の神学校のように、やあ奨学金はありますよ。やあ寄宿舎もありますよ。いやなら何とかしてお気に召すようにしてあげます、なんていうような神学校だつたらですね、本当に、主は今も生きていらつしやると信頼していく勇気がでなかつただろうと思いますね。

今私に、そんならおまえ、神学生を訓練しろと言われたら私が訓練してもらつたように訓練できないんですね。だからそういう点で、折滝先生は立派な教育者だつたなあと思うん

です。

これは信仰とは別なんですけれども、私の母は、小学校の四年しか行つてない。昔は小学校四年で卒業だつたんです。だから手紙をめつたに書かないのに、時たま書いてくる手紙には、折れ釘みたいな字で、カタカナで書いてあるんです。私がかなりの年になつてから、そんな手紙を書く母親をもつたつていうのは情けないなあと思つたこともあるんですね。けれどもその母が、私を育ててくれた時のことを今考えるんですね。私が子供を育てる時に、母が私を育てた時のように厳しく、しかもちやんと人間としての道は、こうでなくちやいけないということを、はつきり示して育てる事がむつかしかつたですね。それをしてくれた母親を、今は、偉い教育家だつたと思うんです。学者じやないけど、教育家だつた。人間を本当に正しく育ててくれたと思うんです。そのお蔭で今イエス様を信じることができるようになつたんですから。私は母を、この世の学問はないけれども最高な教育者だと思うんです。

それと同じ様に、無茶苦茶な中で訓練して、本当に力をもつてイエス様に従う弟子に訓練をする人つていうのは、本当の教育者じやないかと思うんですね。だから、今日の牧師、伝道師に欠けているのは、そういう中で、神様に直接ふれるような教育をする人がいないという事ではないかと思うんですね。

私が折滝先生の所に八年おいていたゞいた間には、随分いろんなことがありました。戦時中、まあ戦前の満洲事変なんていう時代からずつと国の考え方が、軍国主義に傾いていつた時ですから、そういう中で、信仰をもち続けるということ自体も困難な時でした。

防空訓練なんていうのがあつて、防空訓練にも出なきやならん。集会もしなきやならん。あれもせにやならんで、随分色々とありましたけどね。そういうことが一つ一つ全部、イエス様を知る機会となつたんですね。

そういう中で、祈つては答えられ、あるいは思いきつてお言葉に信頼して、その中をつき抜けて来たことが、今日までの四十年間こうしてイエス様に従わせていたゞく準備期間だつたと思うんですね。そういう意味で、私の修養生時代というのは、人間の目から見た無茶苦茶であつて、神様の目からごらんになれば、一番いい教育の期間だつたんじやないかと思うんですね。

七、野村先生とのこと

私が昭和七年に献身して、翌年の昭和八年に野村君のお父さんが献身してこられた。そして一緒に生活したんです。だから七年ぐらいご一緒でした。

野村さんのお父さんは非常に素直な従順な方で、私はどちらかというと、ぶすぶすした方ですからねえ。だから、かえってそれが互いに助けあうことになってですね。それが今日まで長いお交わりをもつことができたんだと思うんですね。同じ釜のめしを食うた仲間というわけです。だから一緒にいろんな事をやりました。百姓もやるし、肥汲みもやるし、本当にやらんことはほとんどないくらい。お産ぐらいはしなかったですけどね。（笑い）　あとの事は何でもやったんですね。洗濯、掃除、それから炊事もやりましたね。

いざとなればなんでもやるんです。養鶏もやるし、まあ、ニワトリの料理なんて野村君のお父さんは、なかなか上手だったんですよ。何でもしなきゃならなくなってやったんです。まあそういうことで、今考えてみれば、そう大した事じゃなかったように思うけれども、その当時は、信仰がともかくないもんですから、そりゃあもう随分大儀な中を通るなあと思った事もあります。

八、八幡へ遣される

そういうことで、八年間の修養生時代が終って、昭和十四年の十一月三日に、八幡へ来ました。

その前に、いつ頃だったですかね、九月か十月頃だったと思います。折滝先生から呼ばれて、

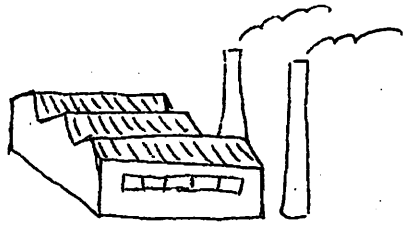
「八幡の方で、専任の牧会者が欲しいと言ってきてるんだよ。君はどうするかね」と言われて、

「どうするかねと言われても、私は献身したんだから、言われたとおりに従います。お導きがあれば、どこにでもお従いします。」と言ったんです。

「そうですか。そんなら君に八幡へ行ってもらおうか。」ということで八幡へ遣わされて参りました。

その当時、折滝先生が言われるには、「八幡って所は人間の住む所じゃないからなあ。あんな所は風紀が悪くて、子供なんか育てる所じゃない。福岡ならまあ大学なりともあるけど、まるでアフリカの中といったような、あんな所では生活できんな。」

実際当時製鉄所の周辺では鉱粉・炭粉で赤褐色や黒灰色によごれた労働者が裸で街中を歩いて居たので私も喫驚しました。



アフリカ大陸には宣教師がはいっていって伝道をやつたから、「それじや、私は日本のアフリカへ行きましよう。」って言つたことがあるんです。

そういうことで、昭和十四年の十一月三日に八幡にきたわけです。それから今日まで、まあ四十年ですかね。今年の十一月三日で四十一年になりますね。

九、先生の信仰

修養生時代、こまごましたことは、たくさんあつたんですが、もう時間のかすみの中に消えてしまいました。

ただ言えることは、今日の様にものわかりのいい人が多い時じやなかつたんです。昔は、縦割の秩序がやかましい、上の人に対しては絶対服従なんですね。だから何を言われても「そうじやありません。こうです。」と自分の考えを述べると、言い訳すると言われるんですね。

言い訳は許されないから自分が思いもしないようなことを「おまえがやつたんだろう。」と言われても「ハイ」って従わなきやならない。そして自分はこうだと思つても言う訳にはいかない。そういう中で言えるのは神様だけなんですね。

祈るということがどんなに幸いであり、力であるかということを教えられました。

だから人に言つてもわからないし、言うことも許されないのだから神様に向つて言う。なぜならば全てを知り給う方がいらつしやる。この方が私を知つて下さるから、どんな誤解をされても神様がご存知だから、神様からの報いがある。だからそれでいい、というような信仰に入つたのは、そのような事からです。

自分が一番信頼し、尊敬する先生にさえも理解してもらえない。そんな時になお神様が理解して下さるんだつていう、これが私の今日まで支えていただいたお恵みだと思うんです。

皆さんもこれから社会に出ていろんな問題の中に入ると、なかなかみなさんの本当の気持をわかつてくれる人つていないんです。わかつたようでもわかつていないんですね。だから、そんな時にどこに気持をもつていくか？　どこにもつて

いつたつてわかつてくれる人は一人もいないんです。
その時にイエス様だけは〃私どものすべての弱きを思いやることあたわざる祭司の長、われらにあらず。〃と書いてありますけども、本当に、この方の所にもつていつてみんな祈つて信頼していくと、私どもは人からじやなくて、神様に知つていただいているからいいという平安がいつでもあるんですね。
そうでなかつたら私どもは今日伝道はできないと思うんです。
人は誤解々々しかできないんです。みなさんは、自分の気持はみなわかつてもらえてると思つているけども、それはわかつてもらつてると思つてるんであつて、相手はわかつてないけども、わかつているような顔をしているだけかもしれない。だから友達だからつていうんですね。
こつちが本当にあの人のことを思つている。相手はとんでもないことを思つてくれてるなあと思つてるかもしれない。それでも友達だからつていうわけですね。けれどもそれでお互いに思いあつて親友だと誤解しているんです。誤解して一生涯送つてもいいんじやないかと私は近ごろ考えるんです。
だから夫婦なんてそんなもんじやないでしようか。〃うちの主人は私だけを愛してくれてる〃と思い、また主人の方は〃うちの家内は私のことばかり考えてくれている〃と。……実際そうでないとしてもそのような誤解をして一生涯暮らせれば、幸福です。私、近頃そう思うのです。
だから本当のことはイエス様だけが御存知なのです。そこまで主に全幅に信頼することができれば世の中楽なのです。だから、そういう訓練には無茶苦茶な中にぽんとほうり込まれるつてことはいいことなのです。あんまり温室育ちだと、訓練する機会がないので、何か問題にぶつかつた時にペシヤンとなつてしまうんです。
前に一度、私の子供に言われたことがあります。
「お父さんは、ものわかりがよすぎて困る。うちにはおふくろが二人いて、親爺はおらん。」つてね。
「それならもつとガンコ親爺になつときや良かつたの。」と言つて笑つたことがあるんです。
確かに昔の親爺は頑固でものわかりが悪く、いろいろ言つてもきいてくれず、わかつてもらえない。そういう父親がいたということは、頑固で邪魔のように思うけれど、実はそれが子供にとつて逞しく生きる訓練になるんです。近頃はあまりものわかりのいい父親が多すぎると思いますね。なかには

何をいつてもわからずやで、頑として動かない父親がいればそれは感謝すべきことだと思うんですね。

まあ、修養生時代に、その様な中で直接神様の声に従うこと、祈ること、そして信頼し、思い煩わないこと、一度任せたらとことんまで任せる。そうしたら神様は現実に答えて支えてくださる、という事を体で知ることができました。

これは大きな力ですね。赤ちゃんはなんでも口にもつていきますね。あの赤ちゃんの時代は口で知るのです。目や耳や頭じやわからないけれど、口で知ることができる。丁度その様に私共がイエス様を知る時に、目や耳で知るのではなく、直接口をもつていつて自分の肌で知るのです。そのように、いいことも悪いことも、皆一つ一つを神様の前にもつていく。それにはやはり聖書をよく読むことですね。

私が今でも感謝するのは、その八年間の間聖書を読む時間があつたということです。一日にしなければならない作業は大体決つているから、それを終えたら後は自分の時間なので、その時間に聖書を読み、そして祈る。祈ることと聖書を読むことは、自分で学ばなければなりません。人が手をとり足をとりしてくれない。

この間もある方が言つていたのですが、その方は、昔表具屋さんですね。表具屋さんて、あの掛軸なんかを作るんですね。ああいう所で弟子に入つた。その人は、小学校を卒業して弟子に入つて何をさせられたかつていうと、子供のお守りをさせられた。まだ何もできないから子供のお守りをさせるんです。子供のお守りをする為に弟子に入つたんじやないのにと思つたんです。朝、おんぶしたら背中が冷たくなつてるんです。何故かというと、おんぶした赤ちゃんのおしつこで背中が冷たくなる。それでも降してもらえないんですね。

まあそんな位に子守りをしたつて言うんです。しかし、その人は、たゞぶらつと子守りをするんじやなく、子守りをしながらよその職場で、いろんな仕事をしている人を見ている訳ですね。そこでその職人のやり方を見ていた。だから、よく金粉をふつたのがありますね。あの金粉をふるところを、子守りをしながら見ていた。それが後に自分がいよいよ本職になつた時に、それでやつたところが師匠さんから「お前いつそんな事を覚えたか」つて言うてびつくりされたつていう訳ですね。

だから昔は教えなかつた。何も教えてくれなかつた。初めは「紙を継ぎなさい」つていわれたんですね。紙をね、こう二枚継ぐでしよう。あの表装に使う紙つていうのは、継ぎ目

をこんなに、沢山厚くくつついちやあだめなんです。本当に薄く、ちよつとくつついたところでキチツと継ぐ、それで継ぎ方が悪いとペコペコにしわがよる。そんなになつたらもうものにならない。

とにかく紙を継ぐことからやつた。紙を継いで出来上がつたら師匠さんの所へ持つていく。するとお師匠さんは、ずつと見てるそうです。そして悪い所があるとポンと投げて、そこにあつた物差しでパシツと叩かれてですね。一体どこが、何が悪いのかわからないんです。ただ叩かれるだけなんです。

それから、持つて帰つてどうして悪いんだろうつて一生懸命考えるんですね。またやり直して持つていく。それでまたずうつと見て悪い所にきたら、またぽんと放り投げられるんですね。

まあ、そういう中で修業したつてわけですね。

ある時、糊を貼つて紙を何枚か貼り重ねていつたり、それからきれを貼つて、そして軸をつくらなならん。そのきれの貼り方なんか自分が実際やつてみないとわからないんですね。昼間は子守りなんかして先蹤のやり方を見てるけど、夜になつたら、その裁ちくずがあるのを掃除する時集めてとつておいて、夜、皆が寝静まつてから、電気のコードをずーつと長くしといて、箱をつくつてその箱の中に電気を入れる。外に明かりが漏れると、まだ起きてるつて人から言われるし、お師匠さんから「お前、電気代がかかるぞ」つておこられるそうです。だから外に光が漏れないようにして、一生懸命でそのはぎれでけいこしたんです。

そして、つくり方について自分が一つの考案をしたけれども、お師匠さんにそう言うわけにいかない。それで、ある時に、何かの品物わまかされた時に、お師匠さん、実はこうこうこうした方がいいんじやないかと思うつて言つたら、そんならお前、それをしてみろつていうわけです。それが良ければいいけれど、そんな事をして出来損なつたら承知せんぞつて言われたわけです。それから一生懸命でやつて、出来上がつたのをかけてみたところが、師匠さんがうなつたんです。それで、それから後は何もかも皆、その人にまかせてくれた。

そういう風で、昔はちつとも教えちやくれないんです。自分で何とかそれを学びとろうと、自分がそれを自分のものにしようと盗むような気持ちで、一生懸命になつたんですね。

だから今は、あんまり教えすぎるつていうんですね。あんまり教えすぎるからつていうんで、又かつていうんで学ぼうという気持ちがなくなつちやうつていうんですね。だから、

そういう点で、今の学校教育は間違つているんじやないかつてその人は言つてるわけです。

そういう点で、柘植先生の無茶苦茶神学校つていうか、修養生の養成つていうのは、あるいは良かつたんじやないかなつて私も考えたんですね。というのは、やはり教えてもらうんじやなくて、自分が学びとる、自分が教えていただく、神様から教えていただく、聖書を通して教えていただく、自分の体で学ばなきやならないんだつていう、そういう意欲つていうか、どうでもつていうような渇きがあつたんですね。

ところが今日の神学校では、単位とらなきや駄目さ、わからなかつたら教えてやるから、又学校すんだら俺の所に来いなんてわけで、あんまり先生が教えすぎるんです。だからなかなか生徒が本当にイエス様のところにいかないんですね。だから、そういう事を聞いた時に、私もそうだなつて思うんですね。

イエス様の時代でも、そんな神学校なんてなかつたし、イエス様は、決して手取り足とり、教えてらつしやらない。ただ自分の行く所に一緒に行つて、お祈りしたり、説教したりするのを聞いたり見たりしただけなんです。

だから、私は、今一番教育つていうものについての考え方を見直さなきやならない時がきてるんじやないかと思います。いつか萩に行つた時、吉田松陰の松下村塾を見た時、そう思つたんですね。あそこも何人かの人が一緒になつて生活しながら、その中で学びとつていたつていうんですから。やはりそういう教育が人間と人間との接触によつて初めて学ぶことができる。これが本当の教育じやないかなと思うわけです。

そういう意味で、私の修養生時代つていうのは恵まれた時だなあと思います。

十、思い出すこと

まあ大体、修養生時代の思い出というのはそれ位でしようかね。そりやあもう、牧師先生の奥さんがお産で、お産婆さん呼びに行けつていうわけで、雪の降る中、とんで行つたこともありますけれども、まあそういう経験も、やはり家庭において、子供がうまれそうな母親がいるという時に、いろんな事を考えてあげるために必要な事だつた。

それから又、ある時には家族がない人が、結核の末期に、口頭結核になつて声があまり出ないようになつていた。そこに行つて世話をしてあげなきやいけない。その人は骨と皮ばかりになつて聖書が手に持てない。その聖書がもてない人が

言いました。

「先生、これからあなたが伝道する時に若い方に言ってください。目の見える間に聖書を読んで、声の出る間にお祈りして、讃美歌をうたって神様に感謝するように。どうぞこの事を健康な方、若い方に言って下さい。自分が、今、本当に聖書が読みたくても読めない。神様に感謝したいけれども声がでない。こうなってから、心の中じゃ感謝してるけど、声を出して感謝できないという事は、本当に情ない。だから声の出る間に神様に感謝し、又お祈りし、そして目の見える間に聖書を読んで、内に蓄えておいていただきたい。そのように伝えて下さい。」って私に言われた事を今でも思い出すんですね。

それからもう一人の方は、やはり結核の末期で、ひげをはやして、本当に重態だったんです。けれども、なんとかひげをそってほしいというんで、私行ってひげをそってあげた事があるんです。まあそういう中も通るけれども、感染しないように、その時はお祈りして、神様本当にあなたは火の垣をもって守ると、お約束ですから、この兄弟のためにひげをそりますからどうぞあなたが感染しないように守って下さいとその時一生懸命お祈りしました。顔を離していてはそれませんから、近くにくっつけてそります。そういう中も通りましたけど、神様はそういう中で守って下さり、今日まで重症な菌のたくさん出る解放性の病人の中においても守って下さった。そういう事を通して、主が生きてらっしゃるんだって事をいろいろと教えられましたね。

だからよくお話しする桑梅子さんて方ですけれども、結核で召される時、私がはじめて立ち会った。天国を見ながらですね「ああ嬉しい」と喜んで送った時には、私は「ああこれで私はいつ死んでもいい」と思ったんですね。この一人の人が喜んで、あの最後に来る恐ろしい死を、恐れもしないで喜んで死の河をのりこえて天国へ行く、その手伝いをすることができただけで私は、これでいつ死んでも悔いがないと思ったんです。どんな大臣でも、どんな金持ちでもですね、人の最後に来る死を恐れず乗り超えさせてあげる、希望を与える人はひとりもないけれども、私はイエス様のゆえに、その最後に来る死の恐怖の中にあって、その姉妹にイエス様をお伝えすることができたことによって、本当に希望をもってですね。目の前に天国を見ながら帰って行った。そのことで、私はもういつ死んでもいいと思いましたけれども、それから四〇年、こうして神様から元気に守っていたゞいてですね。そ

れも、修養生時代の思い出のひとつだったと思います。

（このあと、百合子奥様を交えて楽しい雑談となりました。話しは、八幡に来られた時のこと、結婚のことと発展いたしましたが、教会設立当時のことは、次回改めてお伺いすることにして、勝手ながら割愛させていたゞきました。何卒次号をご期待ください。）

銀婚の年

広田　寿

「久し振りの入院ですね」　寝巻きに着替えてベッドに上る私に家内がポツリといった。結婚前、私が長い病院生活を送ったのを想い出したのか、今日まで二十五年間、無事に過ごしてきたことへの感慨をこめてか。私はだまってうなづいていた。

今年は銀婚の年、旅行をしたり、プレゼントなども考えていたが、四月長男の進学、それに五月父の死が続き、法事だ初盆だといつている中に秋を迎え、今度は私が入院してしまつた。人の心にある計りごとの成就には時の与えられることを改めて知らされた。

×　×　×

フウッと我にかえつた。こゝはどこなんだろう。ボンヤリと天井の明るさが目に写つた。耳元で名前が呼ばれた。アーと返事した。喉がおしつけられていて声にならない。大きな深呼吸を繰り返しさせられて少しらくになつた。「口をとがらせて！、まぶたをしつかり閉じてみて！」　言われる通り力を入れて動かしてみた。動いた。「よし、大丈夫、よかつ

た！」と叫んでいる。

同時に「あつ、手術していたのだつた。うまくいつたのだ」と、やつと気がついた。

一切をゆだねた神がすべてを導いて下さつたことを感謝した。天井がかすんでしまつた。

頭にぐるぐる包帯を巻いている音がする。呼吸用の喉のパイプが取りはずされた。喉の痛みをこらえて思わず体をよじつたが、手足は完全にしばりつけられていた。まだよく力が入らない感じ。やがて点滴を続けたまゝ車に移されて手術室を出た。

廊下で家族の声がした。祈りつゝ待つ時間は長かつたことだろう。しばらくゆられて病棟の観察室へ帰つた。

どれくらい時間がたつたのか、五時の面会終了の放送があつて、家内が明日またくると告げて出ていつた。ベッドを覗き込んで話しかける輪廓で見分けはつくが、まだピントが合わない。くちびるがバリバリに乾き、水を要求したところまだ早いという。やつと許しが出たのが八時であつた。次いでらく呑一ぱいの味噌汁をのませてもらつた。昨晩九時から絶食していたのと、生き返つた実感がお腹にしみ渡つた。手術の箇所は痛まなかつたが、喉の痛みと体中の筋肉が打ちのめされたようで寝返りもできず、体が熱く汗びつしよりになつて寝つかれなかつた。看護婦が度々検温と血圧測定にきてくれた。

夜半からゆつくり休んだのだろう、大きな峠を越した安らぎをもつて迎えた朝の日は、まぶしく心地よかつた。主治医が見えて「顔色が出た」と喜んでから、「手術はうまくいつた。二時間半予定していたところ十五分早くすんだ。たゞ、見つからない神経があつて随分探したが最後まで出てこなかつたので心配していた。ほんとうによかつた」と語られた。話をきいていて、「手術中、主が盾となり安全なところに覆つて下さつたに違いない」と感謝した。もし、この細い神経が切れていたら、まぶたもくちびるも動かなくなつていたであろう。今からのち、このくちびるは神の讃美だけにとつておきたい。

あとは一日毎に、手術がうそであつたようにぐんぐん回復していくのがわかつた。

主が偕にいて手をのべて支えて下さつた。

みなさんが熱心に祈つていて下さつた。

特に弱きを覚える時、祈りの力のすばらしさを知らされた。主は、弱い私をのがれる道を備えて導いて下さつた。感謝し

ても感謝しても足りない思いである。

× × ×

病院というところは何と病人の多いところだろうか。特にここは重症が多い。声の出ない人、鼻から食物を流し込む人首に孔をあけて呼吸している人もいる。手術に望みをつないで精いっぱい耐えている姿には心が痛んだ。しかも老若男女人を選ばず、次々と送り込まれてくる。

環境は恐しいもので、検査をしながら一週間も過ごしたらすっかり病人に仕立てあげられ、周囲の状況をみてかげりがかすめたこともあつた。衛士があしたを待つに似た長い夜も経験した。

入院後ヨブ記に導かれ、如何なる時にも神に信頼してゆるがず、罪を犯さなかつたヨブの信仰に教えられた。また、ダビデの祈りを通し、ひとみのようにわたしを守り、みつばさの蔭にかくして下さる神に目を向けることができて、大いなる平安を与えられた。

「恐るゝ勿れ、只信ぜよ」との御聖言が強く私に迫つて下さつたのもこの時であつた。神はこのような試練を通して強めて下さることを、今度も教えて下さつたのである。追い詰められた思いの重症の方々のためにも祈らずにはおれなくなつた。こうして手術の日には、すべてをゆだねる平安が与えられたのは感謝であつた。懇ろな神は、私のためにゆつくり時間をかけて、その日の備えをなして下さつたことに気づき神を讃美した。

神は不思議なことを成される。私はくる朝毎に、生かされた証として刻まれた頬のしるしを忘れないであろう。神はくすしきみわざをもつて勝利を与えられた。ハレルヤ

アアメン

（五四・十・二十二　九大病院にて）

主に寄り頼む人はさいわいである（詩34・8）

（西原フクヨ姉の思い出）

「主の聖徒の死はそのみ前において尊い」（詩116・15・）

西原フクヨ姉（八幡在住当時の名で呼ばせて頂きます。）がカナダへ行かれてから、召天されるまでの主の御導きと祝福をご遺族の手紙によって感謝して記録します。

（A）

母が昨年（一九七七年）十二月十五日にとうとう召されてしまいました。三年前（一九七五年）に乳癌の手術をうけて、医者に完全によくなっていると言われ、一九七六年の夏は一人で無事に韓国旅行も終えることが出来、皆喜んでいたのですが、こんなことになってしまいました。

母がもつと蘇生をしていてくれたらと、悔まれてなりません。と言うのはトロントの冬は寒いので日曜礼拝以外の祈祷会などは、わざわざ出かけないで、家で静かにお祈りをして過ごして下さいといつも頼むようにして言っていたのですがどうしても聞かずに昨年の三月寒い夜の祈祷会に出かけ、教会で卒中を起したのがきつかけになったのでしょう。又癌が再発していたのです。夏中健康があまりすぐれなかつたのに、九月に教会の創立記念の行事があった時に、健康な若い人にも無理な大任を引受けて来たので、私共が体に無理になると心配しますと「神様の御用をして死ぬ様なことがあれば本望」と言って、聞いてくれませんでした。十月末に肺癌と診断された時は既に手遅れになっていました。何とかして助けたいと日本から「丸山ワクチン」なるものまで取り寄せて試みましたが何の甲斐もありませんでした。

万一のことを考えて、看護婦の注意がよく届く所にと、詰所のまん前の個室を特別にお願いして、夜間も二、三〇分おきに様子を見てもらっていたのですが、あまり静かに召されたので、誰も気がつかなかつたそうです。

私共もそれぞれ家庭があり、子供があり、大変でしたが、それでも母を第一にし、医者も四人の専門医が入れ替り立ち替り、少しでも母が楽に過ごせる様にと、あれやこれやと方法を考えて協力してくれ、この世の中で又今の科学の段階ではこれ以上は望めないと思う位の療養生活でした。夜中の三時に病院から連絡があつたので、子供を主人に頼んで、私が車でかけつけました。幸い母の個室に専用の浴室・トイレすべてがありましたので、夜中にも拘らず心おきなく母の身体

を斎戒沐浴し、三時間かゝつてすつかり清めました。病室のベットの上で、すつかり天国への衣裳に衣替えをし、お化粧などをしているうちに夜が明けました。医者や看護婦さん達が入れかわりたちかわりお別れの挨拶に来てくれました。皆母の様に平和に天国へ召された人ははじめてだと言つてくれました。病院の規則として死後直ちに霊安室に移される筈でしたが、これも特別の計らいで母がチャペルに移される迄、家族皆と母と共に過ごす事ができました。日本人教会からは岩井先生がおいでになり、母の病室でお祈り下さり、又慰めて下さいました。

母は十五日早朝召されたのですが、こちらの習慣でしようか、二日間はチャペルにて友人のお別れの訪問をうけ、葬儀は十七日に行われました。私達家族はそれぞれ三ケ所の違つた教会に行つていますので、葬儀も三ケ国語で行われました。まず母の教会員の方のために韓国語で、私達の教会の方の為に英語で、和子達の教会員の為に日本語でという次第でした。

母が召されたあと、その顔があまり美しいので病室にて、又チャペルにてと、写真を沢山撮り、一冊のアルバムを作りました。

遺言で母は埋葬にいたしました。私共の家から車で三十分も高速道路を走りますと郊外に出るのですが、母がまだそんなに悪くならない頃、多分十月の初め頃だつたと思いますが母と和子と一緒に墓地の下見に行つたのですが、それはそれは美しい墓地で母も満足して、万一のことがあれば、そこにしたいと言つていたのです。母はつねに余り健康にすぐれなかつたせいか、すべての遺言を私達に言い渡して召されました。墓地の木や花の種類まで私共に言いつけていましたので本当に言い残したことはないと思います。

母が召されたあと一週間程は、私は全く食事もとれず又眠ることもできず、全く病人の様になつてしまいました。母が癌だと言われても、こんなに早く亡くなるとは思つてもいなかつたのです。ショックが強かつたのでしよう、ハンナが蔭ながら心配していたのでしようか、ちようど一週間程たつたある日、昼食の時、ポツリポツリと話し出したのですが、前夜エス様がおいでになつて、おばあちやんが天国でどんな様子をしているかを話して下さつたと言うのです。全く栄光に輝いたような天国の話に、私のふさぎ込んだ悲しい心がすつかり喜びに包まれてしまいました。

神様が幼児に天国を啓示して下さつたと思うほかは理解の仕様がない出来事でした。

ハンナの話は三十分以上も続いたのでしようか。それから毎日ハンナの話を思いかえしていたのですが、そのまゝ忘れ去るにはあまり勿体ない話なので、一週間も経つた後でしようか、ハンナにもう一度できるだけ思い出してもらつてテープにおさめました。（F）

（B）

「今から後主にあつて死ぬ死人はさいわいである。」

母が入院して間もなく、それまで母は別に前田教会の方々の事を話題にするような事はあまりなかつたのですが、何かの会話の機に「やはり、こんな時は榎本先生がなつかしいね。お会いして頭に手を置いて祈つて頂きたいね。」と申しておりました。（先生のかわりに私がいつも母の頭に手を置いて祈つてあげていました。）

私達がこちらに来てから（一九七五年）二年半の間に四回の入院がありまして、私は自分の体力ぎりぎりのところまで本当に自分の持つている限りの力を出し切つて孝行しましたので（した心算でした）思い残す事は、後悔することは全くないだろうと思つていましたが、母が亡くなつた今、思う事は、あの時あゝすればよかつたとか、こうすればよかつたかも……などと後悔する事ばかりで、未だに涙のかわくことがありません。

母の亡くなる一週間ほど前までは、母のいうことをどうにか聞きとることもできましたし、何とか母を慰めてあげようと、いろいろ面白いことを話してきかせましたら、亡くなる二日前まで面白そうに笑つてくれました。又毎日母に讃美歌を五ノ六曲うたつてあげていたのですが、そんな時母は目をつぶつて、眠つているように見えても、ちやんと聞いているらしく、いつも手で拍子をとつているのでした。

母が亡くなつたときは、亡くなる前のやつれた表情がすつかり消えて、元気だつた頃の母の顔が戻つて来て、又私が言うのも変ですがあんまり美しい顔でしたので、びつくりもし又感激しました。母は間違なく天使に迎えられて、父や兄の待つ天国へ行つたのだという事が母の死顔を見てよくわかりました。

この国では病院で亡くなるとすぐに病室から地下の霊安室に移され、家族ともあえないのですが、母の場合、始めから終りまで、病院側が母に、そして私達に好意的であり、何もかも例外をつくつて便宜を計つてくれました。霊安室に移される事なく、午前二時半になくなつて、その日の昼頃、霊柩車で遺体をチャペルに移すまで、病室の母のベットの上で、

天国への晴着をつけて安置されていたのでした。看護婦さん達、又母の病棟の他の部屋の人々が（病棟は全部個室でした）入れかわり立ちかわり母に別れを言いに来て、口々になんて美しいのでしょう！とため息をつきながら帰つて行くのでした。私の知り合いの日系二世の方は、今迄多勢の亡くなつた方を見たけれど、貴女のママの様にきれいな死顔をした方は初めて見ました。と言つてくれました。実際私も母の様にきれいな輝やかしい顔をして亡くなつた人をはじめて見ましたし、それは明らかに天国を目ざして死んだ顔なのです。これは私にとつて何より誇らしいことでした。

私達もこの国へ来て、本当に様々のでき事に出あいましたけれども、母が亡くなつたことは私達の一番の心の痛みです。又死ぬという事が生命をもつて生きている以上誰にとつても避けられないことですから、母の清らかな死を目のあたり見て、誰にとつても、改めて、恐れなく死を迎えることのできる信仰を持ちたい、又持たなければと、今求道者の様なつもりで、心を新たにして、家族一同で礼拝に励み、又毎日必ず聖書を開き、面倒なカタカナもおろそかにせず、精読しています。

（K）

福音

大田邦子

主の聖名を崇め感謝します。

主の奇しきみ業をもつて、九十三才十ケ月の母を天国に迎え入れて下さいましたお証しを、拙い文ですけれども記させて頂きます。

母と申しましても姑ですが、母の方が実感ですので母と致します。

母と生活を共にしましたのは、私が嫁ぎましてから三十六年間でございます。この間、様々な問題の中を通らせて頂き私が入信に至りました動機も、母が大きく占めていた事は事実です。神様はこの様にして私を救いに導いて下さいました。

母は六人のよき息子・娘に恵まれ、少々の我儘はたいていい通してくれる兄妹でした。それだけに一ケ所に落着いて居りきれず、一寸事があると別の子供の所に行きます。でも明治の母はどうしても長男に世話になりたいと申しまして我が家での生活が殆どでした。最近では長男である主人は種子島に長期出張で文字通り私と二人の生活でした。時折近くに居る岩井の妹や、博多の孫や曽孫の出入りで賑う有様です。とこ

ろが五年前、とうとういろいろの問題が高じて東京の長女の家で世話になり度いと言い出しました。私はこんなごたごたの最中に出て行くことは、今度おばあちゃんが帰り度くとも帰りにくくなるから、問題がおさまつてから気持よく行く様に再三言いきかせますがどうしてもきき入れず、揚句の果てには、若し東京で死んだら長女の婿が立派な葬式を出してやるからと言つてくれるなど、言いはじめ、とうとう止めるのも聞かず、もうこの家には帰る気持のない様なことを言つて上京しました。私ももうこれが地上でのお別れになるかも、それなのにこんな別れ方をしてと本当に悲しさと辛い思いでした。

〝主は愛する者を訓練し……　あなたがたは訓練として耐え忍びなさい〟

二年が経ちました。その間私も上京する機会が与えられ母を訪ねましたが、前の強気は全くなく、帰り際には何とも言い難いいとおしさが残り、さびしい思いで別れました。その内帰り度いと言つて参りました。私はなんだかホッとした気持になり、何時でも帰つていらつしやいと返事しましたら、大変喜んで五十二年六月元気に帰つて参りました。開口一番「あんな事言つて帰つて来られた義理ではないけれど、お世話になりますね。」と声が震えていました。私は嬉しく胸がじーんとしてあまり言葉が出ませんでした。聖書の放蕩息子の譬を思い出し感謝しました。もう九十を過ぎたというのにまだまだしつかりしてました。東京で母と最後に逢つた旧い知人の言葉を借りますと、母の事を「腰は曲つていられましたが、頭も気性もしつかりしていられるのに驚きました。戦前もそうでしたが美人で知的な顔だちでした。少し険阻に見えましたが、私はこうさんが好きでした」と。本当にそうでした。

二人の生活が始まりました。その年の秋には兄妹の止めるのも聞かず、郷里である山口から萩にと墓参を兼ね、私を親戚やら七、八十年前からの思い出の地を案内し度いと云つて出かけました。山口・萩の街中を車中から付人の私に説明することです。同乗の親戚の人も驚く程の記憶力でした。余程嬉しかつたのでしよう、「又来年も邦子さんと一緒に来ますね。」と別れる人毎に申しました。

母にしてみれば、いろいろ迷つていたと思います。帰つて来た長男の家はクリスチャンである。又近くに住む次女の岩井の妹も救われている。でも後々の事は私に頼みたかつたのでしよう。

”人の心には多くの計画がある。しかし主のみ旨だけが堅く立つ”

母も私もわかりませんでしたが、主はその時既に帰るべき真のふるさとを示して居て下さったのだと思います。

一番気になつていた墓参を終え、安心しましたのか、それ以後、体調が崩れ出し、年末には風邪をひき床につく様になりました。熱が高くなりますと、幻覚症状が現れ、私も不安になりかけますが、主の「あなたがたを耐えられない様な試練に合わせることはない……のがれる道も備えて下さるのである」のみ言葉と、先生はじめ皆様のお祈りに支えられ乗り切らせて頂きました。処がこの様に肉体が弱り不安になると口癖の様に「岩井でもエス様の話しをしてくれて有難いと思うけど、今日迄苦しい中を助けて貰つた自分の神様仏様を捨てるわけには行かない。だから若し私にお迎えが来たらお寺さんに枕経だけあげて貰つて、あとは何式でお葬式をしてもいゝからよろしく。お骨は東郷でいゝからね。」と南無阿弥陀仏と唱えます。この言葉に私の不信仰が頭を抬げます。その都度「彼は望み得ないのに、なおも望みつゞけた……」の聖言で辛うじて保たれる有様でした。私がエス様から耐えて待ち望むことを訓練して頂いたのは、母が信じ切つていた仏様のことでした。私は母に十字架の救いを強制はしませんでした。気のすむ様にさせていました。でも蔭では切に祈りました。

一応元気にさせて頂きました処、七月十七日思いもかけぬ「子宮癌ですよ。しかも末期でもうあまり長くありません。」との宣言を受けました。以前にもこの様な症状がありましたが、心配ないとのことだつたので、この度も軽い気持で診療を受けに行つただけに、頭をガツーンとぶたれたようなショツクでした。傍で私の言葉を信じ頼り切つている母の姿を見身体は二つ折に曲り、枯木の様な身体がこの様なむごい病に侵されていると思うと胸の動悸がおさまりませんでした。

「エス様なぜこの様なことが？」と問いかけたくなりましたが、

「汝は我に従え。」「わが為すこと汝いま知らず。後これ知るべし。」のみ言葉に望みを持たせて頂きました。

それから母の闘病生活が始まりました。私の祈りも母の霊のために更に真剣になりました。

病の癒しは勿論のこと、母が一日も早くエス様を受入れ感謝の日々を送らせて頂き度い。

この世での使命の終るのがみ旨でありますならば、聖くな

つてみ前に立たしめて頂き度い。どうか癌の苦しみを取除いて平安の中にみ国に帰らせて頂き度い。とその願いでいつぱいでした。

しばらく通院して九月に入院、苦しいコバルト治療にも耐えさせて頂き、出血も止まりましたので、母の切なる願いもあり、十二月わが家に帰して頂きました。夢の様だと泣いて喜びました。

年が明け、「我限りなき愛をもつて汝を愛せり。故に我絶えず汝を恵むなり」の新年の聖言で力が与えられました。母の状態は目に見えて衰えて参ります。その上、私達の願いに反し、痛みも増して参ります。エス様を知らずに、たゞ気丈な母だけに「どうして自分はこんな目に逢わなければいけないのだろうか。私は何も悪いことをしていないのに……」と訴えていました。

そのうち「余程何か罪深いことをしたのだろうか……」と言いますので、私は「そんなこと何も考えないでいいの。そんなおばあちやんや私達の為にエス様が十字架にかゝり血を流し、すべての罪を許して何も心配しなくてよろしい。帰つていらつしやいと招いて下さつてるのよ。」と言いますと、又しても「エス様の有難いことはわかるけど仏様は捨てられない。」と拒み、「死んだら枕経を頼む」と言い南無阿弥陀仏を繰返します。今度は私も真剣に万一の時は本当にどうしようと己の考えが頭を抬げます。今の母の状態を見ると仏式でしなければいけないだろうかとか、いやいやすべてお任せした筈なのに肉の思いになつてと打消すものゝ、エス様どうなるのでしようかと焦りさえ感じました。すると

「汝静まりて我の神たるを知れ」とピシヤリと己を低くせられました。

だんだんと痛みの訴えも日夜の差別なくひどくなり、病状は悪化して参ります。でもその時私は本当に感謝でした。それは私がエス様の憐みで母の看病を「キリストの僕として心から神のみ旨を行い、人にではなく主に仕える様に快く仕えなさい」との聖言で主のご用として私の霊をも柔げて頂き、又「耐えられない試練には逢わさない……」の聖言に支えられ、朝に夕に祈りつゝ一日々々の務めを終えさせて頂いたことです。

一月の終り頃から痛みとの戦いの合間に語りかける言葉のはしばしに、母がだんだん柔らかくなつて来るのがわかりました。こんな事もありました。苦しさに手をやかすこともありました。そんな時「邦子さんどうしてそんなに優しくして

くれるの」とか「私をもつと叱つて頬でも叩いて」など言つて泣きじやくるのです。私も母が本当にあわれで可哀想でした。この様な時、母と心を一つにして祈ることができ、主のご愛をひしひしと感じました。

二月三日俄然不思議なことが起りました。午后五時頃でしたか、母の身の廻りを片付け食事の仕度に出て行こうとすると、母が「邦子さん、私の様なものでも天国に入れて貰えるかしら」と問いかけてくるではありませんか。私はびつくりしました。その時の母の謙虚な眼ざし、自分から心を開いて言い表わして来たこと。今迄の母からとても考えられないことです。「誰でもエス様を信じれば天国に入れて貰えるのよ。だからエス様を信じて、ハイ有難うございます。アーメンと言えばいいのよ。」そして十字架のことを話し、もう何も心配しなくてもいゝ事を言い聞かせました。そして「榎本先生に来て頂こうね。」と言いますと、「ウン」とうなづき「お忙しいのに済まないことね」と素直に聞き入れるではありませんか。全く感動的な一瞬でした。この日は土曜日で聖日の前夜なので一寸躊躇しましたが、電話させて頂きました。

もうこれからは神様の演出でプログラム通り一分の狂いもなく事が運ばれて参りました

八時に先生がお見え下さいました。妹も駆けつけました。そして先生は判り易く「今まで神様に背を向け自分勝手なことをして生きて来て、今わが家に帰りたいと思つても帰りにくいので、エス様が十字架にかゝつて下さつて、すべてを許して、帰つていらつしやいと招いておられるのですよ。だから有難うございますとたゞ信じればエス様の処に帰れるのですよ。天国に入れて頂けるのですよ。」と優しく懇に導いて下さいました。そして「信じますか。」のお言葉に「ハイ」とうなづき「有難いことです。有難うございます。」とはつきり言い表しました。先生が力強いお祈りを捧げられますと先生の〝アーメン〟に続いて、低い声でしたが〝アーメン〟としつかりした口調で言いました。

エス様を受け入れ神の子とされたのです。

命の書に名が記されたのです。

感激でした。その時、母の顔も和らぎ、額のしわも心なしかのび、安らかな表情となりました。私はエス様に感謝しますと共に、自分の不信仰を心から悔いました。しばらくの後又痛みとの戦いが始まりました。その翌朝からはゆつくり話しが出来る状態ではなくなりました。又この時以来、仏様のことは一切口に出しませんでした。

五日に東京より妹が看病の手伝いに来てくれましたので、この事を話しますと半信半疑の面持ちでした。

九日に藤掛のお父様お母様が見えて大変喜んで下さいました。その時言われますのに「天国に入る時は病もすつかり癒され、栄光の身体となして迎え入れて下さいますよ。」と言われました。私は身近にクリスチャンを送るのは初めてで、実感として受止めることができませんでした。

母は腰がひどく曲つてまして、仰向きになれず横向に休むので、ベッドも短く作つてましたが、十三日頃足許のベッドの空きが狭まつているのに気がつきました。それは曲つていた腰が延びて来たのです。それと同時に痛みも薄らいで行くではありませんか。全く驚きでした。

十三日夜が最後の食事でしたが、食事の後朦朧とした意識の中で「有難う」とお礼を言い「皆によくして貰つて有難うよろしくね」これが聞きとれました最後の言葉でした。

十四日には種子島の主人も東京のもう一人の妹も、臨終の知らせをくれたら、駆けつける事になつていたのですが、待機しきれず集まつて来ました。この事も不思議でした。兄妹皆揃いました。

十五日お医者様も今日明日でしようかと申されました。今日はもう痛みもなくなり、本当に曲つていた腰ものびベッドから足先が出てしまいました。夕方より息づかいが少し荒くなつて参りました。私共の気持も灯が消え行く如くだんだんと暗く閉ざされて参ります。

榎本先生にお電話致しました処、早速にご夫妻で駆けつけて下さいまして、母の枕元を皆で囲みました。

先生が「人の肉体は霊の器に過ぎないから、肉体は死しても霊は生きているので最後まで呼びかけてあげなさい。」とおつしやつて下さいました。そして「地上での旅路を終え病も苦しみも一切ない永遠のみ国に帰らせて頂くのです。主のご愛を信じ、おばあちやんの旅立ちをお送りしましよう。」と私共を励まして下さいました。奥様も「おばあちやん私達も後から行きますから天国でお逢いしましようね。」と言葉をかけて下さいました。

讃美歌四八二番

〃なつかしくも浮ぶ思い、あまつふるさとはややに近し…〃を歌い、最後に先生が「こう姉妹の霊をみ手にお委ねします。お受入れ下さい。」とお祈りを捧げられました。

私は先程まで暗い思いに閉ざされておりましたが、先生のお導きとお祈りで霧が晴れる様に拭いとられ、十字架をはつ

きりと仰ぎ望まして頂きました。
先生のお帰りを門までお送りし、玄関に戻るや、二階からのチャイムで駆け上りますと、もう最後の息づかいでした。安らかに十時二八分地上での生涯を閉じ天国に移されました。
”国籍が天にある者はご自身の栄光の身体と同じかたちに変えて下さるであろう”
の聖言通り腰ものび、病も癒され栄光の身体となして永遠のみ国に帰らせて頂きました。
先生がお宅にお着きになられますのを待ち構えてお電話させて頂きました。
先生ご夫妻、高木様ご夫妻が引返しお見え下さいまして、すべて主が成就なし給うたことを感謝し讃美しました。
誠にハレルヤです。
「肉体は亡びても霊は永遠の命にあづかり永遠のみ国に入れて頂いたのですからクリスチャンには死はないのですよ」
との先生のお言葉通り、母の顔は死の顔の面影は全くなく、エス様を信じ切つた安らかな眠りそのものでした。
エス様を受入れ僅か十日余りの信仰でしたが、長い生涯で最良の時だつたと思います。

納棺式の時

「良き名は良き油にまさり、死ぬる日は生るる日にまさる。」
の聖言を頂き感銘を受けました。
誠に勝利の最後でございました。
蔭にあつて永い間お祈り頂きました先生始め皆々様に心から感謝をもつてお礼申し上げます。
母の召天に際しまして多くのお恵みを頂戴しました。
「一粒の麦地に落ちて死なずば唯一つにて在らん。もし死なば多くの実を結ぶべし」
聖書のことはよくわからない者でも、唯十字架を信じる事によつて永遠の命にあづからせて頂ける”福音”とはこれだと思いました。
「すべて信じる者に救を得させる神の力である。」
生かされている人間として一番恐れます死。
又人の力ではどうすることもできない厳粛なこの時に、兄妹（未信者も信者も）皆集められ、目の辺りに誰も動かすことのできない事実をもつて、お約束の聖言の数々を具体化し、裏付して下さいました。
母の癌も末期であると知らされて以来、闘病生活中も「なぜ？」と問いかけたくなる時もありましたが「後でわかる様になるだろう」の如く

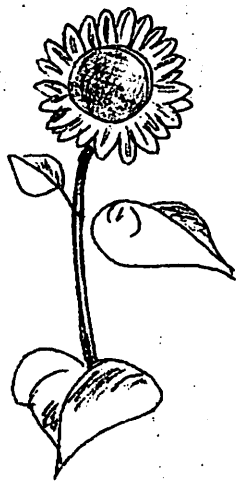
「このしばらくの軽い患難は働いて永遠の重い栄光を滋るるばかりに私たちに得させるからである。」の通りでございました。

主は今も生きていらして母の葬儀に集いました私達それぞれに、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ様、語りかけて下さいました事を覚え感謝しました。

神様のご計画の素晴しさ、すべて時のある事を再確認させられ、母の九十三年余の生涯を通し、証し人としてご用に用いて頂きましたこと、襟を正さずには居られませんでした。

これからも神の力の証しをもつて一足一足を歩ませて頂き度いと願つております。

今一度、十字架を仰ぎ感謝致します。



「救いは神にあり」（詩三・八）

岩隈　多賀子

父は三十八才の時（約四十年前）北九州市の黒崎の地で支那料理屋を開業いたしました。と申しましても、母方からの借金で、店は建つたものの仕入れの金も残つていなかつたそうです。文字通り裸一貫で始めた商売でしたが、約五年間で一生を遊んで暮せるほど儲かりました。父はあつさりと店を人手に渡し、悠々自適の生活を始めました。第二次世界大戦の初期の頃で、まだ世の中の景気も良かつたのですが、間もなく物資の統制が厳しくなり、強制的に料亭は次々に廃業へと追いこまれていきました。「先見の明があつた」と、当時の同業者達から羨ましがられたという事でしたが、敗戦の為に父の計算はご破算となりました。そこで再び商売を始めることになりました。「おれは五十才までは働くが、それ以後は遊んで暮す。」と常々広言しておりました父は、またそれを実行した人でした。商売を始めた時から死ぬまで、父が利用した金融機関はたゞ一つでした。「信用」が無くては何もできないと言つておりました。自分を頼つて来る人々に、その「信用」で借金をしてやつたり、相談に乗つてやつたりし

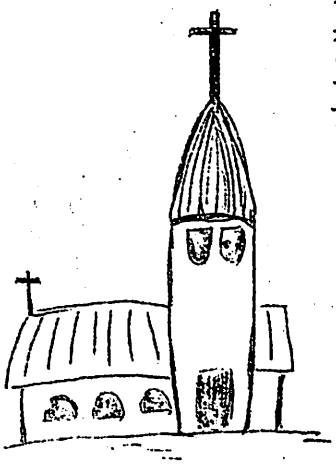
て、人助けもしたようです。「おれが一旦引受けたことで、出来なかつたことはない」というのが自慢でした。父の知人に、色々な神を信心する人がありました。「おれが助けてやつたのだから、拝むならおれを拝め。また、あんたたちを儲けさせてくれるのはお客だからお客を拝め」と言つたそうです。父が反対している事を承知で教会に行く私にも「神とはもともと無いものだぞ。神に頼るなんか弱い人間のすることだ。本当に頼れるのは自分だけだぞ。人も頼りにするな。」と申しておりました。ただ、若い頃に父が尊敬していた人から「人間は先祖があつて今日の自分があるのだから先祖祭りを大切にしなさい。先祖祭りを疎かにした者は碌な死に方はせん。」と教えられた事を心に止め、仏事を大切にしておりました。併し、お寺参りは全く致しません。仏壇に向つて手を合わせる事は稀でした。由緒ある神社仏閣を訪ねる事は好きでしたが、それも建物や美術品に強い興味を覚えていたからでしよう。

このような父が、喜寿の祝を孫達と祝つたあと、僅か一カ月程で突然発病し、何回か高熱に苦しんでは危機を脱するという事が繰り返されました。自力で立上ることが出来なくなりました。次に座ることができなくなり、文字が書けなくなるというように徐々に身体の活動力が薄れていきました。一年後のお盆の時、お経のテープを夕食後に聞くようになりました。「聞いているとさびしくなるばかりだ」と言つてすぐに止めてしまいました。その後、何気ない様子で、私の信仰について聞きたがるようになりました。私は胸をおどらせてイエス様の救いを語るのですが、「お前の言うことはよく解らん」と、いら立つた調子で言うのです。

「榎本先生に来ていただこうか。」と、おずおず尋ねますと、「うん」と二つ返事でした。「自分は人並はずれて業の深い者だから、ただ信ずるだけで救われると言われても、そんな虫のよい話が信じられるか！」と始めのうちは言つていましたが、現実に自力では何一つ出来なくなつていましたから、「信ずる」以外に救われる道はありませんでした。福音を受け入れた父は幼子のように単純になりました。信仰の面では私が先輩だからといつて、いろいろな事を尋ねました。何一つ理屈を言わないで素直に聞き入れました。この世を去る二日前の夜半に、「イエスさま、イエスさま」と呼び続けている父の声に目覚めた私は、始めは耳を疑う思いが致しました。「どこか痛いの。」「うん。」「それでイエスさまを呼んでいたの。」うなづく父。痛むところをさすりながら、

声を出して祈つているうちに父は眠つてしまいました。

父が福音に耳を傾けるようになつてから半年の間、教会の方々の温かいお交わりを熱く感謝いたします。父の救いのために祈り続けて下さいました多くの聖徒たちのご愛を感謝いたします。「信仰がなくては神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。」（ヘブル11：6）私に与えられていた御言ですが、目に見えるところは望みがありませんでした。信ずることさえ出来なかつた私ですのに、絶望しそうになると、慰めや励ましの便りや証しが私の許に届けられて来るのです。「……したがつて、あなたがたの信仰と望みとは、神にかかつているのである。」（Ⅰペテ1：21）私は今、不思議な神さまの御業に、たゞ茫然としております。



「夫の昇天」

小田　ミドリ

「死は勝利にのまれてしまつた。死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。」

（第一コリント十五章五五節）

お父さん、痛かつたろうね。苦しかつたろうね。でもよかつたね。イエス様を信じて神様の子供としていただき、天国に行けたんだもの。わたしたちは、イエス様をとおして一つ心になれたんだもの、本当によかつたね。

五十二年十一月、主人は肋膜と診断され、門司の松寿園に入院しました。

明けて春頃にでもなれば退院できるものと、その日の来るのを娘たちと待ち続けて来ました。

しかし、五月になり、六月になつても主人は退院できませんでした。やがて八月になりました。忘れもしません二十日の朝、入院中の或患者さんから、主人のことで電話をいたゞきました。私はすぐその足で病院にかけつけました。

ところが主人は、足の感覚がなくなり、歩くことはおろか、

立つことさえできなくなり個室に移されていました。私は主人のそのような姿を見てかわいそうでなりませんでした。

入院してもう九カ月も経つています。今日か明日かと退院の日を待ちわびているのに、主人の病気は良くなるどころか悪化の一途をたどつていたのでした。

私はたまりかねて主治医に、「何を聞いても驚きませんから、本当のことを言つて下さい。」とたずねました。しかし先生は「うーん」と言うだけであとは言葉をにごしてしまいました。主治医外の先生にもたずねましたが「大丈夫ですよ」と言うだけで甚だ頼りになりません。

主人と私の心は、医師に対する不信と病気に対する不安でいつぱいでした。

こうなれば全能者なる神様におすがりするほかはありません。私は主人の看病のかたわら、必死になつて祈り続けました。主人も一緒になつて祈りました。

九月の或る日、榎本先生がお忙しい日程をさいて遠路お見舞いに来て下さいました。そして、力強く讃美歌を歌つて下さり、聖言をもつて励まし、慰めて下さいました。また主人の痛い所に手をおき祈つて下さいました。ところが今まで痛い、苦しいといつていた主人の痛みがなくなり、安らかになりました。天地を創造し、これを支配なさる神様のお力を目のあたり見るようで、主人と共に感謝いたしました。先生は帰りに「小田さん、教会のみなさんがあなたのために心を合わせてお祈りしていますからね。」と言つて下さいました。

教会の先生方も見舞いに来て下さり、聖書を読み、祈つて下さいました。また、励ましのお便りもいただき、大変心強く思い感謝でした。

主人は私が読む聖書の聖言に真剣に耳を傾け、聖言を楯に必死に祈り続けました。

私たちの罪の為に、イエス様が十字架にかゝり死んで下さり、そして甦つて今は私たちと共にいて下さる。何と素晴しいことでしよう。私は主人の為に祈つているうちに、このことが実感となつてきました。主人も私も神様とその聖言だけが頼りでした。

九月の中旬頃、主治医から主人の病気が癌であることを知らされました。その時は神様にすべてをゆだねていましたので、あまり悲しいとも思いませんでした。

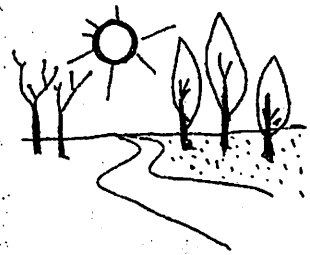
それから約一カ月後の十月十三日夜九時四十二分、主人は地上での使命を終えて、神様のみもとに召されました。

教会で執り行つて下さつた素晴しい告別式。主人は天国に

行くことができました。

榎本先生はじめ、教会員の皆様方のお祈りと励ましを心から感謝いたします。

アーメン



妻との十二ヶ月

正野与志尾

一月
世の隅に妻と老ひけり小豆粥
松の内だけもと妻のかくし紅

二月
妻病めば一人の夕餉寒玉子
着ぶくれて妻ころころと出てゆけり

三月
病む妻に彼岸団子を買ひにけり

四月
探梅や妻の後おす女坂
旅の荷に妻の替足袋加えけり

五月
木の芽和頁繰るごと妻癒えて

六月
うたたねの妻の団扇を借りにけり
常になき朝寝の妻に声かけて

七月
妻旅へ糠漬のカビ梅雨兆す

八月
妻の病む窓辺にゆたかに水を打つ

九月
湯上りの妻にもビールすゝめけり

十月
小春日や妻に付合ふ小買物

十一月
身に沁むや妻を支える松葉杖
よく眼鏡忘れる妻や冬ごもり

十二月
うそ寒や妻が匂はす貼薬

木曜会に導かれて

貞　サユリ

随分前の事です。榎本先生に私の心境を打ちあける為の手紙を出しました。後で主人に叱られ、悪い事をしたかな……と思つています。とに角礼拝で人数が多く、終つて主人も私もサツと教会を出、家路へと急ぐのが常ですが、何故かしら淋しさを感じ、自分から人に話しかける事のできないみじめさ、いつ頃でしたか、主人が私に「お前バプテストに行きたいなら行け、俺は前田教会に行くから。」と云われ、私も色々考えさせられました。でもそんな事をすること自体夫婦にみぞができること確実です。私も祈らされどうすべきか考えつゝも前田教会に導かれ、行くうちに正野悠子さん、林由紀子さん、ほんとうに力になつて下さり、何かしら心温まる思いがしました。又林さんの次男常喜君と私の長女頼子が、銀星幼稚園での同クラス、何かとお会いする機会も多く、会うごとに木曜会のお誘いや、集会での聖書の個所、又恵まれたお話、聞く度に、心慰められ、こんな自分に親しくお交りいただき、唯々感謝するのみです。そして五四年四月を迎え、下の子伴枝も幼稚園に入り、私もゆつくり自分の時間を過ごす事ができるようになり、木曜会には何とかして出席しようと、……その日は朝早く家事を手早くすませ、子供と一緒に家を出、バスに乗ります。〝今日も御霊の力を下さい〟と祈りつゝ教会に入ります。会堂に入ると何故か見えざる霊にふれた感じにひたり、自分の心その時その時に応じて折に合う助けとなる御言葉を頂き、感謝でいつぱいになります。消極的で内気な私ですが、周囲の方々の愛の交りにふれ、ときほぐされ、会員の方々の名前も徐々に覚え、お話しする事もできる様になりました。主人と家でよく話すのですが、教会に来る皆さん全部が金持ですごく立派な人に見え、私共下層階級はひけめを感じます。でも主人は「俺は前田教会に行け…との主の命令だから行くのだ。」と云います。「そうねえ周囲に気をとられていたら、信仰生活もストップしますね。」と私達の会話。〝人はパンのみによりて生くるにあらず、神の言によりて生くるなり。〟〝足る事を知りて敬虔を守る者は幸いなり。〟足る事を学びつつ励んで行こう。という結論になり、主は私達の乏しい事、困つている事、悩んでいる事全部知りつくして下さいますから……今は木曜日が待遠しくなり、主の言葉を聞く恵みをひたすら待望んでいます。いつの頃でしたか、妹の家（博多の薬院に住んでいる）から安東

さんに電話しました。「どうしていますか」「元気……」との口調、その時姉妹より電話で「棚からボタもちは落ちて来ないよ。」と、その一言がどれ程私の心を動かし、木曜会に出席するきつかけとなつた事でしよう。そうだ、霊のマナを積極的に求めなくてはならない。私はなぜもつと早く前田教会に導かれなかつたのかと後悔しています。聖書に〝この道を歩く者は愚かなるとも迷う事なし。〟と書かれています。信仰に入つて何十年もの月日が流れ、時には迷い道をしたり挫折したり、或る時は燃えさかる火の様に、ある時は悲しみに打ちひしがれ、神も仏もあるものか……とこの世に生まれた事をのろい、死を決心したり……今迄あまりにも困難の多すぎた人生だつたかも知れません。でも今やつと明るい広々とした野原にたどりついた様な感じです。と云つて決して生活環境が変つた訳ではありません。周囲に目を向けると一瞬闇に変わりますが、唯ひたすら主を見つめ、この道を（信仰）歩きつゝ、一歩一歩前進し、この教会でこれからも信仰生活を続けさせて頂きます。皆さんどうぞよろしく。時にはお尻をピシツとひつぱたいて下さい。お願いします。

「のぼりゆく道は、よしやつらくとも
主の聖手にすがり　うたいつゝ登らん
かみよながの愛と　喜びやすきの
たなびくかたみに　われを据えたまえ」

（霊感賦　八四）

昨今思うこと

貞　サユリ

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つゝ、走ろうではないか。」

（ヘブル十二・二）

貞に嫁いで七年足らず、二人の子供を与えられ、貧しく乏しい信仰ですが支えられ、教会に導かれている今日この頃です。結婚以前に他の教会で信仰生活はしていた……とは言え喜びも又成長もなく、凡ゆる面に恵まれなかつたせいか、ひがみつぽい性格になり、自分の不幸を悲しみ、聖書に目を向けながらも涙、讃美しても涙、悲しみをぬぐい去つて下さるイエス様…である筈なのに、やはり信仰の弱さをつくづく感じます。（信じきつているのなら、逆境に勝利し感謝でいつぱいであるべきでしよう。）結婚して家事に、育児に追われ涙を出す暇もない昨今、前田教会に導かれて今日、自分の信仰のもち方がほんとうに恥かしく、顔を赤らめて主にお詫びしたい気持でいつぱいです。子供もやつと手を離れ、自分の時間がもてる様になつた今、唯々反省の毎日です。教会で信者の方々に接し、又お話ししていると、皆さんのあの輝いた顔、唯一筋にイエス様と直結している姿に心打たれるばかりです。自分はどうして肉眼に写る場面にとらわれるのか、その瞬間淋しさがこみあげ、信仰の導き手である主を仰いで…と自分に言い聞かせ、性格的な弱さを主が包み隠して下さるでしよう。又私は今一つのとげを持つています。どうすることもできないとげ……恥かしいのですが、痔痛に日夜悩まされ苦痛の日々をすごしています。かれこれ二十年にはなるでしよう。色々な方法で治療しましたが全く効果はなく、今は主にお任せするのみです。（いまにいたるこそ、主のめぐみなれ…いかなる折にも愛なる神は、凡てのことをばよきになし給う。霊感賦26）主はいつも私を一番良い処において下さると信じています。暑さと痛さ、貧しさと取つ組みながら、座ぶとんを重ねて坐りこみ、つくろい物また子供の服を縫つたりしています。（来たれ、来たれ、苦しみ、うきなやみもいとわじ、勇み歌わん主を愛する……さんびか三二一）と口ずさみながら過ごしている昨今です。

先日、さがし物をしていると、古ぼけた昔のキリスト新聞〝勝利者イエス〟が出てきました。一寸目を通していると、「黙せ」、の字が目にとまりました。そうだ、自分の存在がどうであれ、生活がどうであれ、唯黙々と主を仰ぎ、黙々と

主に従い生きて行きたいと願っている今日この頃です。

（五四年八月酷暑の日）

今でも心に残る幼稚園での思い出

貞　サユリ

今から八年前の話です。島根県の松江市にある保育園に赴任し、一年半程保母として頑張っておりました。四六年二月ある大雪の日、先生達数人で雪かきをしましたが、その最中思いもよらず大出血（痔）をし、仕事ができなくなりました。園長は治療をする為私に奈良に行こうと言い（園長は女傑とも言うべき方で奈良と松江を兼任）、三月下旬奈良県大和高田市にある幼稚園に落着きました。処が園では、四月の入園準備に二人の先生が忙がしく立ち働いていました。私も仲間に加わり（実は一クラス定められていた。）私は唯唖然とするばかり、八幡に戻る事もできず（実は飛んで帰って母に泣きすがりたかった。）苦痛をがまんし環境整備、カリキュラム、保育にと頑張る事ができました。蔭でいかに主の力が加わっていた事を……又二人の先生はピアノが上手だった。私も頑張り何時間もねばって練習した。ある時は疲れと痛み、部屋でひっそり涙を流す事もあった。夜は写譜に時間を費し夜のふけるのも忘れる程だった。四月のある日、子供の状態が落着いた頃、橿原市の十市（かしわらしといち）という所まで治療に行く事にな

つた。所要時間約四時間余り、汽車からバスに乗り継ぎ、毎日せつせと通つた。田んぼのあぜ道をさんびしながら歩いて行つた。話が少し前後しますが、日々の生活の一部を記します。

四六年四月〇日

五時すぎ起床。廊下と園庭掃き、三人の朝食作り六時の汽車で行く。私の日課である。

治療終え園に着いた頃、お弁当準備をしている。私が帰園迄クラスの子供は合同保育。

五月〇日

いつもの通り通院。保育できず部屋で静かに祈る。骨の髄迄通る様な激痛、涙が出る。

六月〇日

病院から帰ると、先生達ワックスで廊下みがきをしていた。園長いわく「掃除をすると痛いのが良くなるから、あなたもやりなさい。」私は力を入れ懸命に床をこすつた。信仰とは…逆心理なのだろうか？　なあるほど…次週礼拝園長（牧師も兼任）、ヘブル人への手紙十二章六節「主は愛する者を訓練し、受け入れる凡ての子を鞭打たれる。」私は今愛の鞭を打たれているのだと思うと、感激の涙があふれ、キリストの大きな愛、十字架の苦しみの万分の一でも味わう事のできる嬉しさに主の愛をひしひしと身に感じ、いかに苦しい日々であつても唯感謝と喜びに満たされ、守られた事が不思議でならず、主によつて増し加えられた力によつて今生かされている事を痛切に感じずにはいられません。

「僕たる者よ。心からのおそれをもつて、主人に仕えなさい。善良で寛容な主人だけにでなく、気むづかしい主人にも、そうしなさい。もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行つて苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。」

（ペテロ第一　二・一八―二〇）

「主に感謝せよ」

岡嶋　ミヨ子

一、病院にて

二月十一日―二/三日続いた好天気に何となく春めいて心地よい。礼拝を終つて済生会病院に入院している副島先生をお見舞する。先生は私のお華の先生で、若い時から数十年華道一筋に生きて来られた方である。

昨年末転んで骨折されたとか…ともかく早くお目にかゝつてと心はあせれど面会は一時からという。廊下の椅子に腰かけて時を待つ身のつらさ…時計の針を気にしながら「ぶどうの木」をよむ。これは前田教会でつくられた信者の感謝の記録である。各人各様の病気や事故にあい、悩まれ苦しんだ人、しかしその中にあつてなお主を見上げ、主にすがり、救を求めて行くクリスチャンの涙ぐましい姿の記録だ。さて、時計の針が一時をさした。つと立つて病室へ…明るい見晴しのいい一人部屋。ベットに横たわつた先生はあまりにも痛々しい。静かに目をとじてウトウトしている様だつた。ソッとのぞいてご挨拶をしたが、かすかに口を動かしただけでよく聞きとれない。付添いの文ちやんが事の次第を話して下さつた。何でも昨年末転んで、左の大腿部を折つたとか、五針ぬつた傷は治つているが、伸ばしたままの足は硬直して曲らないとか。さわれば痛がるし、脇にはさむ体温計は支えきらないし、それはそれは大へんらしい。この方がかつては華道界にその名をはせた方とは思えない程の衰弱ぶりである。

私は心で祈りながら「先生感謝しましよう。あなたは二人もついてて下さる方がいます。その上ひ孫さんが二人もいるし、何一つ不自由な事はありません。どうぞこの事だけでも感謝して早く治つて下さい。」と。先生は「はい」とかすかにうなづかれた。

それにしても私は何と幸せなことだろう。私も昨年末二十三日に転んだ。足を踏みはずしてドシンと尻もちをついた。驚きと痛さで息もつけない程だつた。けれども幸せな事に骨折はしなかつた。悲鳴をきいてとんで来た若いママさんたちが助けおこしてやつとコタツまで来たが、折角用意したご馳走も食べず、シャンペンを一ぱいほして車で送つてもらつた。何分土曜だつたので病院はだめ、ありあわせのサロンパスをいつぱい貼つて翌日いつぱい休んで動かなかつた。

「神さまどうぞお助け下さい。」と祈り続けた。そして月曜日に病院に行き、手当をして頂き薬やしつぷ薬を沢山もら

つて帰つた。こうして四〇日間静まつてひたすら養生した。その間「常に喜べ絶えず祈れ。すべてのことに感謝せよ。」「恐るるなかれ、たゞ信ぜよ。」と次から次から浮んでくるみことばを口ずさんで感謝した。ややもすればくじけそうになる私の心に活力を与えて下さるみことばの数々。信ずるが故のみことばの有難さ。そして今は杖もなく歩ける様になつた。

二、別府旅行

老人会の湯治旅行に参加して別府へ三泊四日。杉の井パレスにも行つた。千八百円の入場券で終日遊べるのだからたいしたもの。お湯にも入れるし、ショーも見られるし、屋上の植物園に熱帯魚、二段重ねの滝、その続きの鯉の大群。否、それよりも屋上からの眺望がすばらしい。美しい別府湾をいだく様にはるか向いの国東半島と佐賀関半島、そしてはるか彼方に四国の佐田岬の白い灯台が見える。まさに世界一の雄大なる景観である。私は思つた。これこそ神さまのみわざだと。神は素手でこの美しい大自然をつくられ、未来永劫、人間を楽しませて下さるのだと感動せざるを得なかつた。次に面白いことは温泉だ。七つの温泉が段々に上つてゆく。先づロッカーに衣類をあづけ、タオル一つをもつて入つて行く。むしぶろ、滝ぶろ、みどり温泉など裸天国でまるで大昔の有史以前の姿だ。幸い女だけの日だつたのでよかつた。私たちが三人でキャッキャ喜んでいる時おぢいちやんは下の休憩所で一人遊び……。約一時間後、私たちはべんとうを買つて演芸場に行つた。唄に踊りにお芝居など、それはそれは豪華けんらんたる舞台装置、宝塚のショーを見る様だつた。ゆつくりと弁当を食べながら観劇とはね…まさに天国だと思つた。私はまだ七十三才だ。百まで二十年以上ある。もつともつと視野を広めて活動したい。

三、ヨーロッパ旅行

一昨年は孫娘第一号を連れてヨーロッパに行つた。北廻りで四ケ国、パリー・スイス・ロンドン・ローマと約十日間の点線の旅。山と湖と芝生のスイス。本当に山紫水明とはこの国のことだ。天をつくアルプスの山々。年中雪をいだいて一点の雲のない青空につき出ている第三位高いユングフラウの眺望台に立つた時、無言のまゝ敬虔な祈りがささげたかつた。「ア、神さま感謝です。あなたのみわざの偉大さに感動しました。」と。雪に反射する光がまぶしくてサングラスなくては目があけられない。祥子ちやんのサングラスがすてきだと言えばニッコリしてアッチコッチと片時もじつとしていない。

パチリパチリとカメラのシャッターを切るはやさ…はるか下の方に山男が二、三人ゆつくり降りて行く。背中のリュックが重たそう…。私たちは下におりて、山の中腹にある氷のトンネルを歩いて竜宮城を見に行く。足もとがすべるのでゆつくりゆつくり歩いて…早い人はもう帰つている。よしゆける所まで行けとがんばる。私は思つた。もし今二人きりになつたら…否、神さまと一緒だ。たとえここが日本の裏側であろうと地の底は続いている。神さまの導きによつて帰れると…、さて、無事に下山、ジュネーブ湖畔のインダラーケンの宿に入る。牛乳をのみ、山の様に盛られたレタスを食べ、カタパンをさいてバターやチーズをつけてムシャムシャ。昼すぎロンドンへ一とび約一時間だ。スイス空港を飛び立つた飛行機はアルプス山脈を超えてロンドン空港へ…早いものだ。

ロンドンの町並はドッシリとした全く整然と軒端の揃つた町だ。近代文明の先端を行く様相だつた。ローマのゴツゴツした古びた今にでもこわれそうなひびの入つた家並とは全く異る。スイスの家は窓に花が飾られ、道行く人の目を楽しませ、パリーの町は凱旋門を中心に放射状に広がり、街路樹が美しい。大きい家小さい家と高く低く何となくゆつたりとした美観だ。エッフェル塔の上からの眺望は又格別。セーヌ川をはさんで町並が広がつているが、物音一つしない様な美しさ。ベルサイユ宮殿は約四〇分かゝる郊外にあつて、その室内装飾は美の極致を示している。殊に王様や姫の部屋は豪華けんらんたるもの。民衆の願いを無視して重税労役とまるで略奪行為だつた。王侯貴族の文化は異様に発達したが、庶民の苦しみは極度に達した。だから市民革命がおこり、遂にルイ十六世はコンコールワッド広場で処刑だ。そして自由平等博愛の精神は、市民階級を始めとして農奴開放までに到る。こうして最後パリーに二泊して大部分の人は、もと来た北廻りコースで帰つたが、私達十名余りは帰国を急ぐ方々に席をゆずり、あと一泊して南廻りで帰つた。当時南廻りで帰ればハイジャックコースだ。パリーからテヘラン－北京－東京という、もしものことがあつたらと思つたが、神様が共にいて下さるから大丈夫と心のほぞをきめて残つた。その夜祥子たち若い者は三人で外出。何でもイルミネーション輝く凱旋門に上つたとか、全く驚いた。凱旋門それはナポレオンの勝利の門だ。その上に日本の娘たちが昇つてブラボーとはね。こうしてパリーの夜は明け、ドゴール空港から飛立つた。ヨーロッパ平原を南下して、トルコ、イランそしてテヘラン空港についたのが夕方、建物一つない砂漠、うす暗い彼方の空に

メラメラと石油が燃え上つている。不気味そのもの。息をひそめて左方の彼方を見ると、美しいネックレースみたいな光が大空に弧を描いている。何だか神秘の世界に来たようでややホッとした。しかし飛立つ迄の長いこと。ハイジャックがでたらどうしよう。神様どうぞお守り下さいと目をつむつて祈る。相当長い時間かかつてやつと飛立つた。ああこれでよしと安堵した途端に眠くなつた。何時間かたつて目をさますと、眼下に中国大陸の大平野が見える。あゝいよいよ東洋に帰つてきたか。大平野のあちこちにマッチ箱みたいな家が見え、大揚子江の流水が帯状に見えるころ朝食もでる。白いごはんだ。喜んで口にしたが砂をかむ様でおいしくない。しかし東洋だ。十一時半頃北京に到着。一時間休憩とアナウンスがあつた。途端中国服を着た人がドヤドヤ二、三名入つて来て、パスポートを取上げてしまつた。いささか心がおののいたがタラップを降りた所で一人一人返してくれた。多分厳重なチェックをしたのだろう。これはどこの空港でも降りた所でパスポートを見せ、軽い身体検査を受けたのだが、他国人の入出国がいかに神経をとがらすかをこの目ではつきりみた。カバンでもいちいち中を調べるし、又フランスではカメラに写して中身を調べる。ピストルやナイフや武器らしきものを調べるのであろう。金属はカバンの中でもはつきりうつしだされてしまう。それで犯罪を防ぐのだろうが…。してみると北京でのパスポート検査は軽い。しかし驚いたことに、北京空港に小型機がついた時太天門と書いたロビーに中国兵がギッシリ立並んで、中で休んでいる外人は一切出さなかつた。私は孫を一人残して先におりたので、どうなることかと不安でたまらなかつた。そして「どうぞ神様お守り下さい。」と又祈つた。しかし機から要人らしき人々が数人降りて待合室に上つて行つた途端人垣は消え、孫たち数人が降りて来た。私はホッとして孫たちが話すわけをきいた。おりようとしたらひどく叱られたと、何と言つたか中国語が分らなくてくやしかつたと。だから今度帰つたら中国語やフランス語を勉強すると言つていた。さていよいよラストコースだ。北京を十二時にとびたち、三時間後に我が国羽田空港に着き、タラップを降りてバスに乗り、待合室に帰る。そこには我々の家族二組が出迎えてくれた。パパたちママたち典子にさゆり、美紀も大元気で出迎えだ。うれしかつた。十一日間の大旅行アジアからヨーロッパ、南欧から中東を経てアジアへ。そして国土日本の空へ、北半球を斜に一周したことになる。何と痛快極まる旅路。一度の事故もなく。たゞロンドンからアルプ

ス超えでローマに飛んだ時、アルプスの上空で雷に出合つた時が恐かつた。しのつく雨と雷、そして窓ぎわをイナビカリがサーツと通り過ぎた時「ああ神さま」と叫んで前のシートにしがみついた。しかし我が飛行機と平行に走つたので墜落の難をのがれた。

こうして無事故で帰国できたことを感謝し、翌日ゆつくり休んでいると、品川の息子がニュースを知らせてくれた。ハイジャックが出たと。お婆ちやんよかつたネーと大きな声。祥子も家族の者と喜びあつた。

ほんとに感激でいつぱいだつた。事故もなく私たち二人ともかぜ一つひかずにこうして視野を広めることができた。否せまい島国からとび立つて、北極圏からヨーロツパ平原へ、そしてアジヤ大陸を横ぎつて帰国したのだから…各国の自然も人も食物も文化も特異性があつたが、同じ人間同志のすむ大地だもの、たとえ言葉が通じなくても笑顔は通じた。サンキユー、イエス、バイバイ、ノー、これ位でどうにか過ごしてきたことを思うと嬉しくて感謝せずにはいられない。そしてこの次は次女をつれて、ハワイからアメリカのグランドキヤニオンへなど夢は広がる。

四、エステル会にて

さて二月二十五日は日曜礼拝後エステル会があつた。私は久方ぶりに参加したのだが、未だかつてない程の多勢であり盛会だつた。そしてメンバーがグーンと若くなつている。三十代から七十代までー若いママさんからご隠居さんまで…。さて今日は太田さんや岩井さんの感謝からはじまり、先日のご母堂様の告別式後のご感想（ご母堂様のお人柄や死線に立つて神の救にあづかつたこと）を涙ながらにお話された。お母様は朝鮮で四十代でご主人に先立たれ、五人の子供をかかえて孤軍奮闘されたとか、そして最後にご長男の側に来られ九十四才のご高齢で天国へ行かれたとか。

戦中戦後五人のお子さんをそれぞれ一人前にされるまで、どんなにか心を痛められたことか。余程の信念をもつていられないとくじけてしまうだろうに、又健康と強い気性でないと勝利は得られなかつただろう。又こうした女丈夫のお母さんに仕える嫁ー太田さんはどんなにか戦いがあつたことだろう。けれども主によつてすべてがあがなわれ、大勝利を得られたのである。

人生の航路平坦ならず。たゞ主をたのみ、主によらずんば何かせんだ。

とにかく私たちは弱い。弱い人間同志がよりそつて同じ主をあがめ、主の恵みを感謝しながら一歩々々人生航路を歩いてゆけばいいのだ。今度世界一の大冒険家植村さんが受賞されたが、彼は大学を出るとすぐ山登りをはじめたとか。山は五大陸の最高峰を目ざし、そして実現。そして今度は北極点に達した。きびしい寒さの中で氷上を犬そりで走る。只一人の孤独の旅であつた。彼は犬と寝食を共にし、霊肉のふれ合いの中で願いを実現してゆく。何とすばらしい冒険家。彼はいつも死と生の稜線を独りで行く感じだ。

この頃ツラツラ考えるに、一人旅はすばらしい。何となれば黙々として自然と語ることができる。丁度神のみ声が聞える様に我々の対象となるもののささやきや、うつたえや時には怒りの声もきくことができるからだ。植村さんはその声をきかんとして、今度は南極にいどみたいと言つている。南極大陸まで飛行機なら二十時間と言つているし、昭和基地は勿論各国の基地もあつて科学観測隊の活動も見られる。ずつと前に観測隊員の生活ぶりをテレビ放送していたが、実に、何と言つても雪と氷上の生活であり、寒さとの戦の中に色々観測されてゆく科学者、大学教授、学生と様々の分野から参加している人々の実態である。

この南極にアメリカの家族連れの旅行者がまみえたのだ。全く予想だにしなかつたので驚くと同時に、私の血もわいた。私は北廻りでヨーロッパに行き、南廻りで帰つてきた。だから今度はアメリカにも行きたいし豪州にもと思つていたのだが、もう一寸先に足をのばして南極大陸にも行きたいナー。人間一生のうち自分の住んでいる地球という星を一わたり行つて見たいのはおろかだろうか。否々、夢は大きくもつて生きることが大切だ。毎日の生活に張り合いあることが大切だ。

「恐るるなかれ　ただ信ぜよ」

わたしは、呼び戻された

首藤　正

わたしは、十二年間、教会を離れていた。そして、神からも。

わたしは、自分について、あきらめていた。教会を去る前の十二年間は、無益な努力でしかなく、失われた青春であつたと思い続けていた。

ものごころついたときから、自分がひとに好かれず、ひととうちとけることができず、つねに孤独であると感じていて、言いようのない寂寞感にさいなまれ、ひとを恐れ、自分をうらみ、生まれてこなかつたらどんなによかつたかと思わぬ日とてはなかつた。

自信なく、ひとを見ては羨望の念を禁じることができず、ひととひととが親しげに会話を交えているのを見てさえ、ねたましくて仕様がなかつた。

わたしが二十才を幾ばくか超えたとき、教会に行くようになつたのは、全く劣等感から、なんとかして救われたいという願いからであつた。

それまでに、わたしが縋ろうとしてこころみたものに、断食あり、修養道場あり、生長の家あり、その他、今想い出そうとしてもおもい出せないもろもろがあつた。

あるときは読書に逃避した。ひとにできない技術を身につけることで自信を得ようとした。

だが、すべて挫折した。成功することができなかつた。

そのわたしが、（当時平野町といつて、祇園町の東隣りにあたる界隈に住んでいたのであるが、）どのようにして前田教会を見つけ、通うようになつたのかわからない。

ひとから紹介されたのでもなく、誰から連れられて行つたのでもなかつた。

強いて言えば、自分で見つけて自分の意志で、あるいは選択で通い出したのである。

教会には、その時すでに高木先生あり、伊規須先生あり、東先生（現大分の日出教会の牧師さん）あり、伊規須寮子先生（当時、東さん）あり、勿論野村先生もおられ、先代の河本老先輩もご健在でおられた。その他岩隈さんもおられ、今本さん（今の中村さん）もおられた。

そして程なく、今は関西におられる加藤雷典氏ご一家が越して来られた。

当時は先生もお若く、俊雄さんをはじめ四人のお子さんは

小学生以下で、誠さんなどは、今の先生のお孫さんと同じ位の感じだつた。

今は、おそらく五十才を超えられたであろう諸兄姉も、当時は、いかにも若々しい春秋に富むかたがたばかりであつた。

今にこの教会から何事かが行われるにちがいないという生気あふれるものがあつた。わたしはその昂揚する教会の雰囲気に同化されたかつた。神を知らず（今も知つたとは云えないが、）臨在を知らず、ましてや真の救いも、信仰の何たるかもわきまえ知ることのなかつたわたしの願うところは、その程度のことだつた。

かくてわたしのギャップは深まつて行つたのであつた。

わたしは雰囲気で救われようとした。もちろん聖書の言葉を口にすることはした。しかし信じてはいなかつたのである。祈ることはした。しかし信じることは伴つていなかつたのである。

わたしのこころの飢えは満たされず、劣等感もまた消えはしなかつた。

わたしはあせつた。山に行き、池にたたずみ、岡にのぼつては祈つた。

神よ、われ信仰あらず、信ずることを得ず。願わくばわれをして信じさせ給え。すでにして、我の汝の前に罪人たるを悟らず、感ずることすらなし。

われ、もし救われんために必要にして欠くべからざるものならんには、願わくば汝われをして罪人たるを悟らしめ、かつ悔改めのなんたるかを身を以て体験せしめ給え。願わくば真の信仰と救いをえしめ給え。とこしえのいのちの何たるかを味わいさとらしめ給え。

かく祈る祈りの何拾日、いや何百日かは、最後にはわたしをして疲れ果てさせた。

いかに神を恐れず、人を人とも思わぬ不義なる裁判官をして、ついに有利な裁決をさせる決心に追いこんだ、あのやもめに倣えとの主の御言葉によつて、うなだれる頭をもちあげようと何度も努力しようとしても遂にそうなつてしまつたのである。

わたしは落ちこんでいつた。落ちゆく先は、強いて解釈をつける「教義」のたぐいであつた。

「予定」の教義であつた。

自分が救われ得ないのは、世のはじめから、選ばれていないからではないか。

そうとしか思えない。そうとしか解釈のしようがない。も

しそうなら説明がつく。納得はゆかないけれども聖書に「神は、あわれもうとするものをあわれみ、かたくなにしようとするものをかたくなにする。」とあるからには、自分はてっきり後者の側に属するにちがいない。自分は無駄な努力をしているのにちがいない。

「如かず。去りゆくに如かざるにあらずや。

されど神よ、なんじの決定を変えて、我をあわれみ給うこと叶わざるか。

我をあわれみ給え。我を憐れみたまえ。

かのカナンの女にせし給える如く、パン屑のごとき恵みにても、これをわれに惜しみたもうなかれ。」

すべての人を救う神の福音の大義に、思いを到すことができないまま、絶望していつた。そして、教会へ行くことにも疲れ果て、丁度力尽きた難破船の救命ボートにとりすがつた遭難者が、手をはなしてボートを離れ沈んでゆくように、はなれ沈んでいつた。

昭和三十九年のクリスマスへの、高木先生の電話による招待を最後に、わたしは前田教会に対しても他国者となつてしまつた。

昭和四十年の一月、知人のすすめる女性と結婚した。

信じていもせぬ神前結婚であつた。

かくて、わたしの人生はきまつてしまつたかに見えた。

もともとわたしの両親は教会行きに反対であつた。ましてキリスト信者の女性と結婚することなどは論外だつたに違いない。死後の供養が打捨てられることを恐れてだつたかもしれない。

外からの反対に対してだけだつたら、わたしは屈しはしなかつただろう。如何せん、内側から木葉微塵にくだけ散つてしまつたものを、どうして支えることができようか。

くずおれた形骸よ。空洞化してしまつた信念よ。存在しないよりもつと悪いその死骸よ。お前は、失望と屈辱にまみれて、踏みにじられてしまつた。

死せる魂、いのちのないむくろの如きなりわいが、それから一年、二年、三年と、えんえん十年以上もつづいた。

時として、教会の消息をきくことはあつた。

ある時は榎本先生のお姿を見かけ、一言二言、言葉を交わしたことも一、二度あつた。

「遊びにいらつしやい。」

「はい。ありがとうございます。」

しかし、唯の挨拶として打捨てられた。

母が死に、そして父が死んだ。

当時小学校二年生の長男が、不治の病いと称される病気に罹つたのは、父の死んだ年の夏であつた。

昭和五十年であつた。

妻は泣いた。苦難が始まつた。

翌年の秋、わたしは仕事が変つた。

仕事の勝手がわからず、あまつさえ前任の更迭が無残であつたため、おもしろからぬ雰囲気で迎えられたと思える。茨のポジションであつた。

孤立は避け得られなかつた。

受ける要求は、日毎きびしかつた。

のがれようもなく、そして対応しようもなく、次第に神経が侵されていつた。

三ケ月後には平安が全く失われでしまつた。

自分が自分として感じられなくなり、外の世界が隔離感を帯び、焦燥感のみいたずらに強く、居ても立つてもいられなくなつた。

帰宅しても、夕食もそこそこに家を飛び出し、あてどなくさまよい歩いては心の焦燥をそらそうとした。

ついにたまりかねて、泣きながら、うめきながら、ひとり言のように、

「イエス様、イエス様、助けて下さい。」と、痴れ者のように、くり返す夜々がつづいた。

ある時フト思いついて道路わきの公衆電話にはいり、思いきつて、教会の電話番号を調べ榎本先生へダイヤルを廻した。

榎本先生はおられた。

しどろもどろだつた。いきさつを筋道立てて話せる余裕など全くなかつた。たゞ祈つて下さいと懇願するばかりだつた。

臨在に近づきなさい、とのご忠告にしたがつて、伝道会通いが始つたのは昭和五十二年の春先からだつたろうか。

やがて礼拝に出席するようになつた。日曜日を待ち兼ねて期待を抱いて出席した。

神経症は依然癒えなかつたが、今度こそは空しく去つてはならないと感じていた。もし十二年前と同様に去るならば、もはや救われるときはあるまいと観念していた。

だから恵まれることがなくても、失望を感じることはあつても絶望はしなかつた。

はじめて教会に戻つてきたとき、顔見知りの昔馴染みの諸兄はなつかしげに喜んでくださつた。

対するわたしは複雑だつた。

手ばなしで喜ぶことはできなかつた。心をひらいてうち解けることもできなかつた。

悔いて、心砕けて戻つていつたあの放蕩息子のあり様とはおよそ程遠い胸の内だつたからである。

ノイローゼという病気に強いられて、渋々もどつて来たのであつた。へり下つた心になつていたのではなかつた。

ふてくされてはいなかつたが、もしノイローゼによつて強制されるのでなければ教会にくることはなかつたであろうと思われる仕方だつた。

わたしはあがいた。そして、やむを得ずして祈つた。

榎本先生に、度々助言を乞うた。

「神は、そのひとり子を賜わつた程に、あなたを愛して下さつている」のですよと、いく度かんで含めるようにして言われても、自分のその時の心の苦しみにかまけて、信じたいとは思うけれども、真実とはとても信じ切れなかつた。

モーゼが、イスラエルの民に、いくら、神があなたがたを今の苦しい奴隷生活から救い出すために、自分を遣わして下さつたのだと、強調しても、イスラエルの民は塗炭の苦しみに心が切迫していて、ききいれることができなかつたのとよく似ていた。

孤独だつた。

あるとき、さる教会の先輩に、衷情をうちあけてみた。

神様のみ手にあることであり、どういうお取扱いを神様がなさろうとされておられるのかわからないと言われて、しよげて帰つたこともあつた。

いつ果てるとも知れない幽囚の如き生活であつた。

仕事は苦しく、一つの仕事を片付けると二つの仕事がおつかぶさつてくるというような、その重圧にうち挫かされんばかりの有様だつた。

息子は、若年性糖尿病だつた。

いつ低血糖昏睡に陥るかわからず、日々に不安であつた。からだは連日の残業で疲労こんぱいし、あたまは神経症に犯され、信仰はなく、それこそ「朝には夕だつたらよかつたのにと思い、夕には朝だつたらよかつたのに、」と思うような毎日だつた。

あまり苦しいので、上司に仕事をかえてくれるよう願つた。

待てと言われた。

しかし、待てど待てどその日は来ず、毎日が耐え難かつた。

逃がれる道がなかつた。

朝、通勤のため駅のプラットホームに立つと、接近してく

る列車の車輪に思わず目がゆく。
もし死んでも、神の審きがないものなら、そしてもし自分に、自分と妻にしか頼る者のないあの病気の息子がいないのなら、あの下に飛び込んで総てをおしまいにする誘惑に負けるかもしれないと思つた。
失われてしまつた健康と平常心が取り戻せる日が来ようとは思われなくなつてしまつていた。
五十四年の四月を期して、仕事は大きく変革しようとしていた。
乗り超える自信は全くなかつた。
大きな敵前上陸作戦を前にした兵士のひとりのように、刻々迫る恐怖に、たじろぎおののかざるを得なかつた。
四月が来た。
死ななかつた。倒れなかつた。
しかし、助けも来なかつた。
代るべき交代要員らしき者が来ることは来たが、教える余裕は全くなく、教育するのに気が遠くなるような新人だつた。
わたしは上司の無力を悟つた。そして自分の期待の虹の如きものであつたことも。
まことに上に立つ者も下に居る者も共に無きに等しい。頼むに足らぬ存在であつた。

我、山にむかいて目をあぐ。
我が助けは、いずこより来たるや。
我が助けは、天地をつくり給えるエホバより来たる。
神よ、我を助け給え。
我をあわれみ給え。
汝、地の果ての、もろもろのひとよ。
我を仰ぎのぞめ、
さらば救われん。
と、宣いしにあらずや。
我を助け給え。我を助けたまえ。
汝に向いて挙ぐる我がこの手を払い捨て給うなかれ。
神よ、我をかえりみたまえ。
変化は目に見えぬ形でやつてきた。
北国の春はおそい。
しかし、それは確実にやつてくる。
気がついた時、空には日光が輝いていた。
肌に感じる風からはきびしさが失われ、雪がとけ始めた。
いつの日にかなくなるとも、とても思えないでいた、厖大な雪が、暖かい輝きを帯びはじめ、やがて方々で地滑りのよ

うな轟音とともに雪崩れとなつて谷底の方へ雪煙をあげながら滑り落ちていつた。

そして、そのあとに黒い土が覗いていた。

大地は急速に芽吹き、一斉に緑が伸び始め、みるみる緑の一面となり、あたりはまるで生命の饗宴と化した。

はじめはどこからともなく聞こえていたように感じるに過ぎなかつた小鳥たちの鳴き声が、次第に数を増し、種類が増え、ついには讃美のシンフォニーとなつた。

あの灰色の空と暗雲は、あとかたもなかつた。

あれはいつたい、どこへ行つたのだろう。

あの憂鬱な世界はどこに消えて失くなつたのだろう。

心は喜びと楽しみに溢れ、唇はハミングと歌を奏でる日々の、かくも急速に臨み来ることを、いつたい誰が予測し得ただろう。

そんなことが、かくも短期間にやつてくるとは信じることは勿論、予測すらできなかつた。

聖書は、うれしい、嬉しい書である。

まことによろこびのおとずれを載せた、うれしいうれしい書物である。

あなたがたは、さきのことを思い出してはならない。

また、いにしえのことを、考えてはならない。

見よ、わたしは、新しいことをなす。

やがて、それは起こる。

あなたがたは、それを知らないか。

わたしは、荒野に道を設け、

さばくに、川を流れさせる。

野の獣は、わたしをあがめ、

山犬、およびだちようも、わたしをあがめる。

わたしが、荒野に水をいだし、さばくに川を流れさせて、

わたしの選んだ民に、飲ませるからだ。

この民は、わが誉れを述べさせるために、わたしが自分のために造つたものである。

（イザヤ四三の一八―二一）

今や、わたしの内外にあつた荒野とさばくは、豊かに水の流れうるおす緑野と変ろうとしている。

われ、万物を新たにせん。すでに成れり。　アーメンである。

神よ、み名を崇めしめ給え。

（54・9・2）

わたしに従つて来なさい

カナンの女

「このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命命じ送つた事を果す。」

たゞ今お読みいたゞきましたイザヤ書五十五章八節ー十二節のみことばによつて、皆様、尊い体験をなされた方もいられると思いますが、私も貧しいながらこのみことばは真理であるという体験をさせていたゞきました。今日は、神さまから頂いた数々のお恵みをお証させて頂きたいと思います。

幼稚園の先生になる為の二年間の学業を終えた私は、希望に胸をふくらませて、ある教会の附属幼稚園に奉職致しました。大勢の子供達と楽しい毎日が過せるものと信じていた私にとつて、それは余りにも予想に反したものでした。先生方の確執、その言動はとても神を信じている人達とは信じられない有様でした。又職場だけでなく、力もなく財もない貧乏な私共家族にとつて周囲の冷たさに幾度唇を噛んだか知れません。そして最後に私を襲つたのは結婚問題でした。これら総てのことを通して私は、キリスト信者の正体がわかつたような気が致しました。今まで耐えに耐えたものが一度に噴き出し思い切り声を上げて泣きました。そしてその一週間後、私は神の子としての特権を捨て、悪魔の子として歩むことを決意したのです。今考えますと、どうしてそんな愚かな事をと思うのですが、当時の私は、こんなに私を苦しめるクリスチャン達をだまつて見過ごしていられる神への不信感でこんな行動に出てしまつたのです。母をはじめ家の者みんな悲しみ傷ついていたのですが、一人の伝道者の祈りに支えられていたようです。母はその方の愛を通して、イエス様を見上げることができていたのだと思います。でも私は、その愛なる伝道の方さえ信じてはいませんでした。

神の道に背き、この世の幸せを求めて歩きました。それでも母の涙の祈りに、時折り神の家に帰ろうとしたのですが、心底から神を信じる事はできませんでした。

そして十年、幸せの青い鳥を探し求めて得たものは、多くの人を傷つけ、又自分自身もズタズタに傷ついた己れの姿でした。冷酷な、愛の一片だにないと憎み続けたあのクリスチャン達以上に私は罪深い者であつたことに気付いたのです。悪魔のようなこの私を到底神様は許して下さるとは思われませんでした。この様な私は必ず滅ぼされるに違いない。でも

その前に神さまにお詫びがしたい／必死の思いで、半ば恐怖におののきながら「神さま／。」と叫んだのです。次の瞬間私は畳に頭を伏せたまま顔をあげることができませんでした。主がそこに立つていられるような感じがしたのです。もう恐くて恐くて「神さま許して下さい。ごめんなさい。」と言い続けていました。どれ位経つたかわかりませんが「聖書を読みなさい。」という声があつたような気がしました。それで恐る恐る久しく開かなかつた聖書を手に取りました。どこを読んだらいいのかわかりません。唯パラパラとめくつているうちある活字が目にとびこんで来ました。

「背信のイスラエルよ帰れ。わたしは怒りの顔をあなたに向けない。わたしはいつくしみ深い者である。いつまでも怒ることをしない。」

熱いものが一度に胸をつきあげたかと思うと大粒の涙が頬を伝わり落ちました。「でも私は多くの人を傷つけた罪深い者です。」

「緋のような罪も雪のように白くなるのだ。」

喜びが体をかけめぐりました。私はぢつとしていることができず大声で泣きながら部屋の中をころげ廻りました。この時、私はイエス様の御血によつて新しく生れ変ることができたのです。

新しい生命をいたゞいた私はもう二度と神の道に外れることのないよう聖書を読み祈り、みことばに従えるよう日夜勤めました。そしてその様な私に再婚の道が開かれました。子供が二人いる上、私は一度結婚に失敗した者です。大変不安でしたが「わたしはあなたがたが年老いるまで変らず、白髪となるまであなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い持ち運び、かつ救う。」（イザヤ書四六・三）のみことばをいたゞき、お約束の主を信じて只今の主人のもとへ参りました。その時長男は大学浪人中、長女は高校一年でした。長い間母親なしの淋しい生活でしたから、主人をはじめ二人の子供達も大喜びで歓迎してくれました。私もうれしくつて家族の期待に応えるためにも日々聖書を訪ねつつ歩んで参りました、でも人の口に戸は建てられないと申しますが「先生をしていた人が離婚して、今度は自分の教え子のお父さんと再婚したそうな。」という噂が町内に広がり、近所に買物に出ましても、ジロジロとまるで汚いものでも見るように見られます。私は買物もそこそこに家に帰り「神さま／」と泣きながら訴えました。その様な時「鼻から息をする者を恐れるな。」と言つて勇気づけて下さいますし、それでもメソメソ

していますと、

「岩のさけ目、がけの隠れ場におるわが鳩よ、あなたの顔を見せなさい。あなたの声を聞かせなさい。あなたの声は愛らしくあなたの顔は美しい。」

となぐさめて下さるのです。私は神の愛の中でいつも平安でした。

ところがある日、娘時代に勤めていた学校の校長先生から電話がかゝつて参りました。幼児科教室の先生方二人が校長先生と云い争つた挙句、教室の生徒を半分以上他の幼稚園に転校させてご自分達も辞められたそうで、残つた生徒達の父兄が大騒ぎしている。是非助けてほしいとの事だつたのです。主人や子供達は私が勤めることは大反対でした。勿論、私も勤める気にはなれませんでした。何故なら時の噂の根源はその校長先生であることを知つていたからです。でも噂のよくない私でも教師として迎えねばならない切迫した校長先生の心を考えると複雑でした。そこで神さまに祈りました。「和解しなさい。」お言葉をいたゞいた私は、主人と子供を説得して翌朝教室に出向いて行きました。確かに、学校中大変なさわぎでした。その上離婚する様な性格破綻者が先生として来たのですから父兄達はさぞかし不安だつたに違いありません。でも次の先生が見つかるまでという事で説得できた様でした。不思議に私の心は平安でした。毎日祈りつつ生徒達と遊び勉強しました。そんな或る日、いつものように子供達とおしやべりしながらお昼のお弁当を食べている時でした。突然男の子が私のそばへ来て「先生好き！」と言つたのです。「あらほんとう、うれしいわ」私がどぎまぎして答えると「私も好き！」「僕も好き！」「先生が僕たちの先生になつてよかつた。」次々に言い始めたのです。私はうれしくつて「神さまありがとうございます。」と心の中で呼んでいました。そしてそれ等を隣の部屋で校長先生が聞いていられました。

その次の日から子供達を連れて登校するお母さん方の表情が変りました。そしてその年が終る頃、父兄や校長の熱心な要望に負けて学校に残ることになつてしまいました。神さまは信じる者のために、失敗した所も易きとして下さる事を体験させて下さいました。その上私のする事なす事すべて祝福下さり、学校ではなくてはならない存在になつてしまいました。私は多くの人の信頼に答えるために一生懸命励みに励みました。そうしますと、今まで明けても暮れても神一筋だつたものが聖書を開く時間がなくなつてしまいました。それだ

けでなく、私共の息である筈の祈りさえ忘れる日が多くなつたのです。その事に気づかれた榎本先生は「あなたを神から遠ざけるお勤めは辞めなさい。大切なものを見失つてはいけませんよ。」と忠告して下さいました。でも丁度長男が東京の私立大学に入学したこともあつて経済的に辞めることができなくなつてしまいました。それを言い分の様にして私は辞めようとしませんでした。

その様な頃、娘が私を見る目の中に敵意のあることに気付いたのです。最初は反抗期に入つたのだと軽く考えていたのですが、どうもそれとは違う様で、思い切つて娘に尋ねてみました。「何か気に入らない事があつたら言つて頂戴。お母さん改めるから。」と申しましたところ「母親らしい事を一つもしないで今更何よ。」という言葉が返つてきました。私は自分なりに母親になろうと努力して来たつもりでしたのに…。でもよくよく娘に聞いてみますと、ずい分いたらない面があつたようです。例えば長男は大学浪人中ですから一番早く学校から帰つて参ります。大きな声で「お母さんたゞ今！」と玄関に入るなり言います。そしておやつを食べながら学校であつた事、友人のこと、将来のこと、果ては好きな女性のこと等すべて私に語つてくれます。明るくて素直で、一緒にいて楽しい存在でした。それに比べると長女の方は、どちらかと言うと陰気で口数も少く内にこもる性格ですから、自然に明るい長男と話す機会が多くなつていたのです。その上母親が亡くなつた後、まだ中学生だつた娘が家庭の中心で二人の男性の母親代りを勤めた様でした。学校と家事で大変だつたようですが、結構主人と長男が娘に甘えて楽しかつたようです。ところが新しい母親が来て以来大切なパパとお兄ちゃんが母親に甘えている、とても淋しかつたのですね。その様な娘の心情を計つてやれなかつた。その上勤めに迄出て、ますます娘との間に距離ができてしまつていたのです。浅薄と言いましようか、全くこの時位自分が嫌になつたことはありません。でも私は一生懸命娘に詫びを入れました。でも一度もつれた糸は、もう元にはもどりませんでした。それどころかその日を機に反抗的な態度を取る様になりました。勿論主人の言う事もききません。私共の望むところのすべて反対行動に出ます。ですからせめて短大でもという願いも聞き入れられず、高校卒業しますとすぐ会社に就職致しました。でもその様な娘ですので会社でもトラブルがあり一年で辞めてしまいました。それが娘を徹底的な人間不信に陥らせてしまいました。自室にこもり外に一歩も出ようとしませんし、私共

と交わろうともしません。少々無理して交わろうとしますと、針でさされる様な言葉が返ってきます。悲しくて、神さまに娘の心が解けることを一生懸命お祈りするのですが、その祈りはビンビンとはね返って来るだけで神さまからの答はありませんでした。

そしてある日私は娘から徹底的な言葉を浴びせられました。「お母さんがこの家に来て以来、私は一日として幸せの時はなかった。ずっと死ぬことばかり考えてきた。」吐き捨てる様なこの言葉に私は立ち上る力を失いました。そこに坐り込んだまゝ耐えに耐えてきたものが一度に押し流される様に声を殺して泣きました。「神さま私は長い間あなたに背いて歩きました。そして多くの人を傷つけました。でもイエス様の御血で新しくされた今もう二度と罪を犯すことない様私は一生懸命生きてきました。でも今、私という人間がこの世に存在する事で傷ついている者がいる事を知りました。もうだめです。もう私はできません。」泣きながら神に訴えました。とその時「あなたになんのかゝわりがあるか。」という言葉が目の前をよぎった感じがしました。「神さま、今泣いていてあなたの言葉を聞き洩らしました。もう一度おっしゃって下さい。」すると「あなたに何のかゝわりがあるか。あなたはわたしに従ってきなさい。」という言葉がはっきりと胸の中に刻まれました。「有難うございます。でもそのみことばはどこにあるのでしょうか。」私はそう言いながら聖書を持ち出し探しました。ありました。ヨハネ伝の終りの所です。そして神さまは自分の思い通りにならない娘をいつも裁いている己れの心をはっきりと見せて下さいました。「娘がどの様な事をしようがあなたに何のかかわりがあるか。娘の事はわたしにゆだねなさい。そしてあなたはわたしに従って来なさい。」と想い中で御意志を示して下さいました。「有難うございます。自分の思い通りにならない娘を裁いておりました事わからせて頂きました。私の様に愚かな者を、ここまで導いて下さる事を信じます。娘のすべてをおゆだね致します。そして私はたゞ神の国と神の義を求めて歩きます。」祈り終えた私の心は晴れ晴れとしていました。でも神さまとお約束して歩き出したものゝ、何日経っても娘の態度は変らず、前よりも悪くなるような感じがします。そうしますと信仰もペチャンコになって、メソメソしてしまいます。そんな時必らず主は、お約束のみことばを思い起させ、立上がる力を与えて下さいました。まあこのような事を幾度かくり返している

ある日、娘が思いつめた様な表情で私の前に来ました。「お

母さん私はこの家にいる限り一人前になれません。今の私はどれ程嫌な娘かわかつています。いい娘になりたいと思うのですが、お母さんの顔を見てるといい娘になれません。だから私はこの家を出る事に決心しました。京都に仕事も見つけています。この決心は変りません。反対されても家出してでも出て行きます。」固い表情の娘の顔を見て、その決心の強さがわかりました。言いたい事が山のようにあります。でも言えませんでした。娘の決心を聞いた主人は烈火の様に怒りました。「自分の家でさえまともに歩けない者が、冷たい世間に出て歩ける筈はない。」と言うのです。全くその通りです。でも私から逃れたい娘の気持が私には痛い程わかつていました。それで結局は私が主人を説得して、会社を調べた上という事で二人を京都に送り出しました。そして私はすぐ榎本先生に事情をお話しし祈つて頂きました。榎本先生も娘を京都に出すことに反対されました。でも良くお話しして許して頂きました。そして「祈りを絶やしてはいけませんよ。アロンが手を上げて祈りつづけたように、あなたも祈りつづけて下さい。神さまのみ手によつて守られるように……。」と言つて下さいました。

それから二ケ月程経つたある真夜中のこと、私は大変な腹痛に見舞われました。安らかに寝ている主人を起してはと思いましたが、痛みが激しく、うめき声が口から出て来ます。救急車を呼ぶという主人を止めて祈りました。「神さま、これはどういう事なのでしようか。私に何を教えようとなさつていられるのですか。」そうしますと「おだやかにしていなさい。」とのみことばが返つてきました。「御手にゆだねます。」と祈つて朝を待ちました。翌朝さつそく私は大きな病院へ車を走らせました。思つた通り盲腸炎で、もう危険な状態にあるからすぐ手術をという事になりました。そしてその前に入院の手続きをする事になりました。新築したばかりの設備の整つた病院で、患者も多く大部屋は空いてなく、個室も一日二万七千円のところしか空いてないとの事でした。十日入院して二十七万円、それに手術代や諸費用を考えると、どれ位かゝるかわかりません。長男の学資がかさむその頃、大変痛い出費でした。困り果てて返事を迷つている時アナウンスがあり、私に電話との知らせがありました。主人かしらと思つておりましたら学校の校長からでした。「盲腸ですつてね。」「はい。」「電話で話せないから、とにかくその病院を断つて外に出なさい。そして公衆電話でもいいからすぐ学校に電話しなさい。」「あのもう今から手術するのです。」

「だめよ。そこで手術したらだめよ。私を信じてすぐその病院を出なさい。」そういつたかと思うと電話は切れました。仕方なく私は、「一度家に帰り主人と病室のことで相談して参ります。」と先生に申しますと、怒つた様な顔をして「あなたはそんな状態で帰るというのですか。破裂するかも知れませんよ。僕は保障しませんからね。」と叱られました。「はい。いいです」私は小さくなつて病院を出て外の公衆電話から学校に電話しました。校長先生が言いますには、腕のいい病院だと言われているが、それは昔の事で、今は若い先生ばかりで、自分の知り合いが三人位盲腸の手術を受けたけれども後が悪く、未だに病院を出たり入つたりしているとの事。学校の父兄に上手な先生が居られる。そこは汚いけど入院費が安く、その上手術の腕は抜群との事でした。そこで早速主人と相談してその父兄の病院へ参りました。まあ校長先生の言われる通り薄暗い病室にミシミシと鳴る廊下、大変な所へ来たものだと後悔しましたが、とにかく一刻も早く手術を受けなくてはいけません。先生も私の顔を見るなり、すぐ手術台に上るよう命じました。私はその時主人に娘のところに電話をして一日でもいいから帰つてくれるように頼んでほしいと言う事と、榎本先生と郷里の母にお祈り下さるようにお願いしました。私の盲腸は思つていたよりひどい状態だつたらしく、人の倍の時間がかゝりました。でも手術の間中、主のみ手に守られ平安でした。さすがに名医と言われるだけあつて、その先生の手術は完璧だつたようです。あれから五年経ちますが傷口さえ消えてしまいました。それに余談ですが、その時病院に支払つた入院費は五千円だけでした。

さて主人から知らせを受けた娘は、すぐその足で会社に辞表を出し、その日の夜行列車で帰つて参りました。翌朝病院を訪ねて来て、ベツトに寝ている私の顔を見るなり「お母さんごめんなさい。私のこと心配してこんな事になつたのでしよう。家を離れてみてはじめてお父さんとお母さんが私の事愛してくれていたかよくわかりました。長い間ごめんなさい。」と涙ながらに言うのです。「そうじやないのよ。すべてお母さんが不信仰だつたからよ。」と私も娘と一緒にうれし泣きを致しました。

それからの娘は見違えるように素直になり、家事の一切を引き受けてやつてくれるようになりました。それから半年後、思いがけず、素晴しい男性からの求婚があり、幸せいつぱいに胸ふくらませて結婚して行きました。娘としての最後の夜「お母さんが私のお母さんでよかつた。」と洩らした言葉に

今までの苦労が一度に消えて行く思いでした。

自分の力で何かをしようとする間は、すべて失敗に終りました。でも「あなたになんのかゝわりがあるか。あなたは私に従つて来なさい。」というみことばを唯信じただけでこんなすばらしい結果が得られたのです。そして又、このみことばには付録がつきました。実は娘が結婚致しましてもう四年になりますが、子供が恵まれないせいでしようか「別れたい」と泣いて帰つて参りました。それまで幾度か電話でも泣き事を言つてきてたのですけれど、私共は「辛棒しなさい」といつて相手にしなかつたのです。ところが突然帰つてきたものですから驚いてしまいまして、主人と二人で色々と説得致しましたが、娘は「別れる。」の一点張り。私共もほとほと困り果ててしまいました。例の如く榎本先生や母にも祈つていたゞきました。娘の決心が変らないようですので、私共も心を決めまして娘の意志にまかせることに致しました。わかつて貰えたと思つた娘はやつと明るい表情になりましたので、その後二人で色々と世間話や信仰の話を致しておりますうち、私はふと、先程お話致しました「あなたに何のかゝわりが……。」のこの話を娘に、はじめて語つたのです。始めから終りまでだまつて聞いていた娘が、私が話し終ると突然「お母さん何かわかりかけてきました。今から神さまに祈つてみます。」といつて次の部屋に入つて行きました。そして一時間位経つた頃でしようか、部屋を出て来ました。私もその間中神に祈りました。「お母さんわかりました。この四年間私は彼のために一生懸命尽して来ました。でも彼は自分本位で、私の事なに一つ理解しようとしてくれませんでした。だからそういう彼に私は腹を立てゝいたのです。でもそれは私自身が彼の王となつていたことに今、神さまから気付かせていただきました。もう一度やり直してみます。」そう言つて翌朝福岡へ行き榎本先生に祈つていたゞき帰つて行きました。

「このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送つたことを果す。」（イザヤ書五五章八―十二節）

このみ言葉の如く、「あなたになんのかゝわりがあるか、あなたは、わたしに従つて来なさい。」というみことばによつて、娘と私のむすびつきを深くし、又娘の家庭生活まで確なものとして下さいました。

みことばは真理です。そして光りです。

（大濠公園教会信徒の「ある証」のテープより掲載）

わたしは救われた

綾部時男

わたしがどのようにして神様の救にあづかつたかをお証しいたします。

わたしは昭和五十年七月に、非常に変つた病気「脱疽（ダツソ）」という病気にとりつかれてしまいました。

私の脱疽と申しますのは「突発性血管脱疽」で、右足の膝下五センチの一部に支障をきたし、血管がつまり、血の通りがにぶくなつて、右足の第三指に、まず異常な痛みを憶えました。徐々に先端より溶けてきましたが、血が通つていないから当然でしよう。しかしそれが痛くて我慢ができないほどでした。

一日も早くその腐敗していく指を切り落してもらいたいと思いました。でも医者は切落してくれないので、痛みからは開放されず毎日毎夜苦しみに喘ぎ、のたうちまわる状態が続きました。

これも今考えてみますと、今までに悪の限りを尽して、わがまゝいつぱいに過ごしてきた事への、神様の厳しい戒めであり、天罰をお与えになつたのだと思います。

私は今五十過の老年期にさしかかつていますが、結婚しましたのが三十才の時、昭和三十一年十月でした。

当時、北九州市八幡の黒崎に両親と弟妹達と住んでいましたが結婚と同時に別に家を借りて、新しい生活をスタートしました。そして三十五年に男の子が、三十九年に女の子が産まれ、親子四人の幸福な毎日を送つていました。仕事は漆器の販売をしておりました。

外交で、月のうち一〇日一五日と家を留守にし、九州各地また広島・山口へと、観光地・温泉地の旅館・料亭等を得意先として廻つておりました。

そのうち仕事の取引関係等でいろいろいやなことがあつたり、失望し意気消沈した折、一人で淋しくて旅館にいたたまれなくなり、飲みに、遊びに出歩くようになつてしまい、ついには自分の金で足らず、会社の金に手をつけてしまうようになつたのです。

飲んだり遊んだりするうちに、雪だるま式にその額は増え、帳簿の穴埋めに四苦八苦、頭を痛め、眠れぬ夜も多く、それでも無い知恵をしぼらねばなりません。会社に発覚しては大変です。

そこで、私の会社では得意先からの約束手形は他の店へ振

渡してないことに気付き早速横領した部分に対して空手形を発行しました。印鑑は三文判を買い、旅館で女中を買収して書かせるのは雑作もないことです。三ケ月位先の支払期日にして一応会社に入金したように見せかけ、その期限の前に出張先の銀行に行き手形の代金を払込む。その金も他の得意先の帳簿に穴を空けて作つたもので、その分は又手形を発行するという具合にタライ廻しにしていました。

そんな時、たまたま誘われて競艇に連れていつてもらいました。生まれてはじめて舟券を買いました。それが思いもかけず当つたのです。その時の嬉しかつたこと。大そうな金が懐にはいりました。それで会社の使い込みの金を返済するにはこれしか無いと思い、競艇をはじめ競馬・競輪・オートレースとやりましたがさつぱり勝ちません。帳簿の穴はますます大きくなるばかり、ついに四十年四月発覚することとなりました。

妻の親達は昔からの日蓮正宗の信者で、非常に信心の熱い母親が一方的に離婚という形にしてしまい、妻や子供達とも会社の返済が終るまではと別れて、山口県徳山市にある築炉関係の会社に住込んで働くことになりました。

こゝでも隣りが酒屋だつたせいか、一人身の淋しさをまぎらわす為に七合八合と大酒を飲むようになり、煙草も日に四〇本位を口にする勝手気まゝな生活となりました。そんな時はもう恐いもの無しで〝矢でも鉄砲でも持つてこい〟といつた調子で喧嘩もしました。恥かしい話しですが留置場にも一晩世話になつたこともあります。

そんな時思い出すのが別れた妻や子供たちの顔です。どうしてあんな恐ろしい罪を犯してしまつたのだろう。罪は幸福な家庭を打ち壊し、私から妻や子供をひき離してしまいました。本当に恐しい罪を犯し後悔しました。

そんな昭和四十九年の夏頃、右足の中指つまり第三指が少し痛がゆく感じるようになりました。近くの皮膚科に半年余り通いましたが一向になおる気配がありません。水虫ではないかと、いろいろな方が良く効くといわれた薬もつけてみましたが治りません。そのうち赤く充血し、指の関節の部分の肉が破れて来ました。

八幡に帰り黒崎の総合病院で精密検査をした結果、右足膝下五センチのあたりの血管の一部が流れにくくなり、第三指の、最初水虫と思つていた指も血管が詰まつていたため血が通わず、痛みを感じていたという訳だつたのです。

足首の部分から大きく化膿して歩くことも困難になり、と

うとう友達に付添われて昭和五十年七月四日入院することになりました。

余りの痛さに、主治医に「早く指を切断して下さい」と再三再四お願いしましたが、何の判断も出ぬまゝ飲み薬と傷口治療に時を過ごすのみでしたが、痛くて痛くて仕方がありませんでした。

整形外科の先生五名と部長先生を入れて六名の先生方が毎日交互に廻つて来られ治療をされるのですが、ガーゼをはがす度毎に腐敗した肉がガーゼに付着していき、ついに骨が見えるまでに悪くなつて参りました。

或る先生は「一刻も早く切断をしなければ足の根元から切らねばならなくなる。今のうちに膝の所から切つてもらつた方が良い」と、又他の先生は「脱疽で入院して切らずに退院した人は殆どない。早く足首の部分から切断してもらいなさい。僕だつたらすぐ切つてあなたを痛みから解放してあげるがね」と言つておられた。

月一回、先生方全員の総回診が行われ、その時患者の病状について全員で検討がされる訳ですが、私のレントゲン写真を手にした部長先生は決断されたのか「この足は相当に悪化しているので足の甲の半分の所から切つた方が良い。今のうちに処置しないと手遅れになり、根元から切らねばならなくなる」と主治医に話していた。それを耳にした時、いよいよ来るものが来たのかと全身の血が引く様な寂しい、わびしい気持ちでした。

せめて十年、いや五年でもいいからもう一度職場に戻つて働きたい。そんな気持でいつぱいでした。

足を切つてしまえば、当然のように生活保護を頼りに一生を暗い悲しい人生を送らねばならない……。そんな事ばかり考えてノイローゼになりそうでした。

会社の上司にはその旨報告しましたが、毎日毎晩襲つてくる激痛と闘いながらシーツを涙で濡らしておりました。

そんな或る日看護婦さんから「近いうちにあなたの手術を行いますので、家族の方のどなたか付添の方を呼んで下さい」との事でした。が今の私には家族どころか親なし子なし兄弟なし、親せきの人達にもさんざん迷惑をかけているので構つてくれる人など誰一人ありません。蒸発状態だつた私に残つているものは傷つき汚れた五尺の体、それも歩くことさえできない惨めなあわれな姿だけです。

そんな悲しみのどん底で喘いでいる時に何の望みがありましょう。いつそ死んでしまつた方がまだ幸せだろうと思つた

り、過去のあのことこのことが走馬灯のように私の心の中に浮び、たまらなくなりむせび泣いたものです。

仕方なしに、迷惑がかかることは重々承知の上で、八幡前田教会へ電話をし、叔父高木敏夫の住居を教えていたゞき連絡をとつた。

二日後に十五年振りの再会をした。暫らく会わない間に叔父もずい分と年老いた姿になつていましたが、懐しくて、嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。その叔父は母の弟にあたり、八幡前田教会で入信して二五年になる非常に熱心なクリスチャンであることは親戚一同の話題になつていました。

久しぶりに会つた私を見て喜んでくれました。しかし、私は大変迷いました。私のような犯罪者が親族にいることが教会員の方に知れたら今までの信用はなくなり、迷惑をかけてしまつては、と大変に申し訳ない思いがしました。

松葉杖で歩く私は、洗濯物などを持つて帰つて洗つてもらつたり、教会の説教テープ等を持つて来てくれるようになりました。

真夏の太陽が照りつける中を、重い昔物のテープレコーダーを汗を流して運んで、一週間おきに見舞に来てもらいました。心から感謝しています。もう来るのではという頃になると窓辺によりかかり"神の小使は早く来ないかな"なんて話して待つていました。

右足の痛みは日に日に度を加え、痛み止めの薬も効果がなく、とうとう痛み止めの注射を打つてもらうようになりました。注射の後暫らくは痛みは止み眠る事ができますが、三時間もすれば又痛み出し、注射を求めるが劇薬のため容易には打つてくれません。そのうちに第一指、第二指の爪の下からも膿が流れ出し、痛みもいよいよ激しくなり、ベットにしがみつきながら経文を唱えました。私の妻の家が日蓮正宗の創価学会の信者で、私も励んでいたので"南無妙法蓮華経"と何回となく、同室の患者の迷惑にならないように叫び続けました。しかし一向に痛みは止みません。

そんな時でした。神様にお祈りしてみました。お祈りといつてもどう祈つたらいいのかわかりません。たゞこの痛みから解放されたい一心で、「どうかこの痛みを取り去つて下さい。痛みをやわらげて下さい」と何回となく繰返し、一生懸命に祈り続けておりますうちに、あの激しい痛みはとれていました。シーツは感謝の涙で濡れました。それから夢中になりました。夜中は殆んど祈り続け、神様のみ言にも目を通す様になり、神様からの榎本先生を通しての説教テープを一晩

中、殆んど眠らずに耳を傾けて、たゞ有難いとの一念でむせび泣いたことは生涯忘れることはありません。

そのうち足の痛みも徐々に快くなり、白い包帯に包まれたままですが、松葉杖も使わずに歩けるようになりました。あまりの嬉しさに他の患者さんに聖書を貸してあげたり、讃美歌の本を貸してあげたり、他の患者さんの手足となつて、お茶をくんだり灰皿を洗つたりして過ごしました。

主治医でさえも、第一指第二指は切らねば駄目だろうと半ばあきらめていたものが手術もせずに一一月二八日に退院致しました。本当に夢の様です。これが神様の恵み、愛でなくて何でありましようか。私は神様の恵みと賜物とによつて救われたことをどれ程感謝してよいかわかりません。

現在は徳山市のアパートに一人住いで、毎晩御言をいたゞき、生れ変つた生活を続けております。あれ程やめようやめようと思つていたギャンブルがやめられずに家族を破局に陥れてしまつたものが、神様の愛と、恵みの賜物によつて一切興味がなくなり、パチンコ・酒・タバコ、あれ程飲んでいたのに、今では自分でも驚くばかり、ぜんぜん欲しいと思いません。自分でやめようと思つてやめたのではありません。自然に、いつの間にか口にしない様になつていたのです。人間の力ではどうすることもできない弱い存在であることを悟り神様の聖霊の働きで不思議なほどに大きな力を、この愚かな者にも与えて下さいました。

今は何も考えません。思い煩いも一切ありません。唯神様に総てをゆだねた平安があるのみ。たゞ感謝と讃美と祈りだけです。

日曜礼拝が待遠しく、今度主にお会いしたら、何と答えて下さるだろうかと楽しみにして日を過ごしております。今は毎日毎日が感謝です。

私如き大悪人が、こんなにすばらしい恵みにあづかつてよいのだろうか、不思議なくらい、こわい位いです。今迄にこれ程すばらしい人生つてあつただろうか。これ程すばらしい事を知らずに素通りして勿体ない。もう一度生れ変つたら、五〇年間分、主に感謝のお礼を申上げねば申し訳ないと思つております。

救にあづかつた結果ではなく、神は独り子を賜わつた程に自分の愛する独り子さえ惜しまず罪の贖いの供物として、あの十字架の上に血を流し給うた。その主は私の罪を背負い、「神よ、あの子は何もわからないのですから許して下さい」と言いつつ十字架にかかられた。その主の愛の御血は、私の

体内を通り、今迄にあんな悪い事をした、こんな悪い事もした、その全てを許して下さつたばかりか、今度は新しく造り変えて生かして下さいました。

今度は今迄と違つて、良い業をするようにと神様が備えて下さつたことを深く感謝しております。

皆様方の厚い、温いお祈りをいただきました事を深く感謝致します。

会社の同僚はこんな事を言つています。「あんた何もかも止めてしまつて楽しみはなかろう。ボートぐらい行きなさいよ」なんて……。私は「今迄の百倍も二百倍も楽しみがあるよ」と言つて笑つております。事実「私の救い主であり、暁い主である主イエス様を崇め奉る」これに越した幸せ、楽しさはないと思つております。

〃我限りなき愛をもつて汝を愛せり。故に我絶えず汝を恵むなり〃

又、こんな話もありました。「わざわざ高い汽車賃を払つて八幡まで行かなくても、徳山にもいくらでも教会はあるだろう」と。たしかに徳山にも教会はあります。けれども私は以前昭和二十八年頃八幡に居た折前田教会に通つていたことがあり、前田教会には榎本牧師が居られ、先生の説教が親しみ深く柔かく、又厳しさを交えて話されるたとえ話をもつて私如き愚かな頭の悪い者にも親しみをもつて心に溶けこみ、真実な神様の御声に触れて魂がジーンと引締まり、緊張してしまいます。

聖霊の恵みをいたゞき、帰りの小倉・徳山間の五六分間の新幹線の車内で、テープに録音した説教に目をうるませて、神様の御言を耳にいたしております。

私の様な者をこれ程までに、一切を新しく造り変えて下さつたのが不思議です。

〃イエスキリストは罪人を救うためにこの世に来て下さつた〃　Ⅰテモテ　一・一五

〃わたしは義人を招くためにではなく、罪人を招くために来たのである〃

限りなく神の栄光がありますように祈ります。

昭和五十一年四月に受洗させていたゞきました。

住所（徳山市都町三丁目四ー一）

終

「神の国と神の義を求めて」（前号からつづき）

上島南明

私の願いは、就職の道を与えられることが第一でした。しかし、祈つて願つているのですが、どうしても御言が与えられません。どのような業種を、又どの地にての仕事を選ぶかとか、それ以前に、どの御言に立つて就職を決めるのか全然分らないのでした。たゞ全く不思議なことに家庭のことのみを問われるのでした。

ある夜、教会で祈つておりますと、私の部屋があらわれ、私が机の左側の一番上の食卓に坐り、その隣に妻と子供が坐つている姿が現われました。私は一家の主人なのにどうしても机の中央に坐れないのでした。〝どうしてなのかなあ〟と自問しながら祈つていますと、真白い衣を着た人が机の中央にスーツと坐られました。わたしは一瞬「ああイエス様」と叫び、そして見上げ、おたずねしました。「でも私は一人です」と。すると主は私の真正面に坐つて下さり、「我常に汝と共に居るなり」という御言が聞えました。

私は自分に帰り、拝読しようと聖書をとり出して開けてすぐに心に飛び込んできた御言は、Ⅱコリント六・一四「不信者と、つり合わないくびきを共にするな」との御言でした。私は全くこの不思議な経験に驚きました。

当時、私は一人の女性のことを心の中におもつていました。戸畑伝道所に毎木曜日に参加され、いつも末席に坐つて、静かに祈り、清楚で優しそうな女性でした。〝お若いのに熱心な女性だなあ〟と思い、特別な感情をもつといつた気持は、当初思いもよりませんでした。

しかし、電停まで一〇分位歩いて帰るうちに世間話もするようになり、私の心が彼女に向いて行くのに自分自身気付くようになりました。

私はその時、第一に思つたことは、自分はなんて弱い人間なのだろうということでした。「神の国と神の義を求めて」教会生活を送つており、主の御旨を求めて静まりの時をもつているのに、忍耐もできず淋しさに負けて女性への憧れを満たそうとするのか、という自己嫌悪におそわれ、これではいけないと思い、主にそういう弱い自分を助けて下さいと幾度も祈りました。

しかし就職のことを祈り求めても、全然平安は与えられませんで、やはり、しきりに家庭のことのみを問われるのでした。私は祈りました。「主よ、まず第一に就職を決めていた

だきたいと願つています。次に結婚の時を与えて下さい。しかし、これは私の思いと願いであつて、家庭の問題を解決することが先でしたら、野村恵子さんとのことを祈つております。どうぞ自分の心を話す時を与えて下さい。」と……。

年末の感謝会を終えて教会よりの帰途、たまたま彼女と二人だけになりました。互にこの一年間の主のお恵みに感謝し、楽しい語らいの時をもつことができました。

その時、私はしきりに「不信者と、つり合わないくびきを共にするな」（ヘブル六・一四）の御言と、「主が言われた『わたしの恵みは、あなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ喜んで自分の弱さを誇ろう」（Ⅱコリント一二・九）との御言をいただき、求めていた二人だけの時を与えられたと信じ、彼女に求婚しました。彼女は、当初全く驚かれた様子で私をまじまじと見ていました。そして一言だけ「祈らせていたゞきます」と答えられました。

私は彼女のこの言葉がずつしりと胸にひびき「よかつた」と思いました。彼女は祈つて下さる。結果を何も考えず、主よ御心のままになして下さいと、祈る姿勢をもたせていただきました。

正月の御聖会を終え「主は王となられた」の御言をいただき、私は心よりその御言の強さに心をうたれ、三日間を過ごし、福岡大濠公園教会の御聖会に彼女との出席を導かれ、より多くの語らいの時と、祈り合う時を与えられました。

一月一五日、彼女より結婚の受諾を得、二人で神様のお恵みに感謝し、彼女の両親に許可を得るべく、お話に行きました。

父上は、就職も決つていない私でございましたが、実に平安に満たされたご様子で、驚かれる様子もなく、「娘より話は聞いております。御心だと信じております。今から神様の御旨を求めて共に祈つて参りましよう」と話して下さいました。

一月二〇日、榎本先生司式のもとに婚約式へと導かれました。

野村家の家拝へ毎日参加させていただき、共に結婚式・就職のことを祈つて下さいました。

二月半ば過ぎ、私は就職を与えられない事に少々焦りを感じておりました。彼女に対しても、野村家に対しても何かすまないような気持におそわれていたのでした。

私は彼女にある夜、その事を話しました。その時彼女は

「貴方は働き場が与えられれば立派にやってゆける方だと信じています。また働き場も必ず与えられることを信じています。今、神様の御心を求め、本当に良い祈りの機会を与えられているのですから祈って参りましょう」と励まして下さり共に祈りました。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」

（ヨハネ一五・九）

私は、この御言をしっかりといただくことができました。働き場を必ず主は与えて下さると確信をもって祈りました。そしてその時を静かに待つ姿勢を持たせて頂きました。

二月末、私は教会員であられる小松さんにご主人が勤めておられる会社を紹介されました。産業機械販売の商社で、八幡駅前にあり、教会より五分位のところでした。働き場が教会の近くであればと願っておりましたので御心だと信じて、面接に参り採用を受けました。三月六日より勤務させて頂き、婚約者・ご家族と共に主のお恵みに心より感謝し、結婚式の時を祈り求めました。六月十日に挙式の時を与えられ、皆様の心からの祝福に満たされて、家庭生活へと導かれました。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすればこれらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」

（マタイ六・三三）

私はこの御言を榎本先生に示された時何にもわかりませんでした。しかし先生の言葉は実に確信と力とに満ちておられ、分からない私にも、神様の御言に心を向けさせて下さいました。そして私の為にどんなにかお祈り下さったことかと思います。

私は先生の導きに従い、神様の御言に従うことを初めて学んだと思います。

祈って、神様の御旨を求めて行く信仰へと導かれました。すると神様は、恵みの河の中へ私を入れて下さり、次から次へと恵んで下さいました。主のお恵みは私に、願いをはるかに超えた、私には勿体ないお恵みでした。

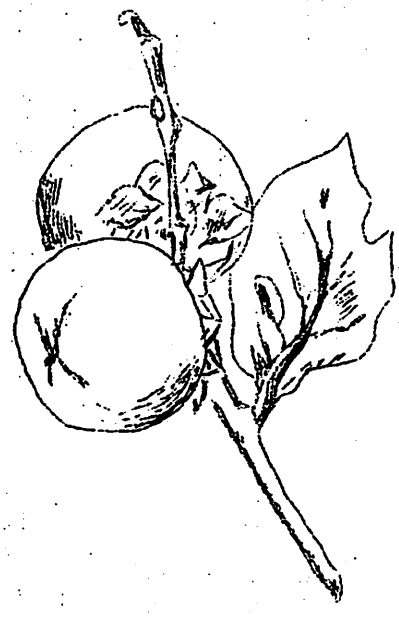
五ケ月間、私は祈って主の御旨を求める他は何もしませんでした。しかし、私は共に祈りあえる妻を、快適な働き場を、そして現在可愛い女の子を与えられ、毎日恵まれ祝された生活をさせていただいております。

私は神様の大いなる御恵みといつくしみとに心から感謝し、讃美致しております。

今日まで祈って下さいました榎本先生、教会員の方々に心

より感謝しますとともに、今後もお祈りに加えていたゞき、ご指導いたゞきますように心よりお願い致します。

終り



編集後記

○ 昭和五十四年は、教会創立四十周年の記念の年でありました。

○ 思えば、榎本先生を通して福音の種がまかれまかれて四十年……。どれ程多くの方々が救いに導かれ、どれほど多くの実が結ばれたことでしょう。

ただ主を崇め感謝するほかありません。

○ 今回のぶどうの木は、当初創立四十周年記念号ということで企画致しましたが、創立四十周年に関するもののほかに、多くの方々からすばらしい救いのお証しや生活の中での体験の投稿があり、これだけでボリューム、内容とも十分なものとなりましたので、とりあえずこれをまとめて発行し、四十周年記念の分は改めて特集号として編集発行することといたしました。

○ 何卒、このためにお祈り下さり、どしどしご投稿下さいますようお願いします。

昭和五十五年十一月

編集　正野

昭和56年3月10日発行
編集者　ぶどうの木委員会
発行者　基督伝道隊
　　榎本利三郎
印刷所　トンボ印刷所
発行所　基督伝道隊
　　福岡大濠公園教会
　　八幡前田教会
　　北九州市八幡東区前田1−10−3